

# 東山114号窯発掘調査報告書

名古屋大学図書



11904375

2006年

名古屋大学大学院文学研究科考古学研究室

# 例 言

1. 本書は、愛知県名古屋市千種区仁座町51番地（名古屋大学構内）に所在した東山（略号H）114号窯の発掘調査報告書である。
2. 調査は、野依記念学術交流館建設工事に伴う緊急調査として、2003年1月20日から同年2月7日にかけて名古屋大学大学院文学研究科考古学研究室が実施した。
3. 調査体制は以下の通りである（所属は調査当時）。

調 査 担 当 山本直人（名古屋大学大学院文学研究科 教授）  
伊藤伸幸（名古屋大学大学院文学研究科 助手）

調 査 員 築瀬孝延（名古屋大学大学院文学研究科 大学院研究生）  
上條信彦（名古屋大学大学院文学研究科 博士前期課程1年）

調査参加者 井上貴弘 大山陽祐 加藤典子 千村崇 米津沙斗子（以上、名古屋大学文学部4年）、新井幸恵 奥村幸恵 小田清香 加藤卓矢 茅野博史 河村聡子 竹中吉博 豊國康太郎 中嶋美香 樋野文人 蓑輪温子（以上、名古屋大学文学部3年）、榎本真希 住田明日香 田中庸太 百瀬充輝（以上、名古屋大学文学部2年）

調 査 指 導 尾野善裕（京都国立博物館学芸課 主任研究官）

調 査 協 力 水橋公恵（斎宮歴史博物館調査研究グループ 技師兼学芸員）
4. 出土遺物の整理作業には、名古屋大学大学院文学研究科考古学研究室の学生のほか、下記の諸氏の参加があった。

近藤幸子 加藤恵子 柴田涼子 水谷吏江 岩間昭道 奥田崇晃 長崎千明
5. 本書は、山本直人・伊藤伸幸・上條信彦・尾野善裕が執筆し、尾野が編集した。執筆分担については、目次と各文末に記した。
6. 本書で用いた標高は、N. P.（名古屋港工事用基本海水準面）、北方位は国土座標第Ⅶ系による座標北である。
7. 出土遺物の整理作業にあたり、次記の方々から格別のご協力を賜った。記して感謝の意を表す。

平 尾 政 幸（京都市埋蔵文化財研究所調査課 統括主任）  
齊 藤 理（桑名市教育委員会文化課 主事）  
宇佐見亜紀（桑名市教育委員会文化課 学芸員）  
嘉 見 俊 宏（三好町立歴史民俗資料館 学芸員）  
吉 川 義 彦
8. 調査記録および出土遺物は、名古屋大学大学院文学研究科考古学研究室で保管している。

# 本文目次

I	遺跡の所在位置と環境	1
1	立地と自然環境	(上條) 1
2	歴史的環境	(尾野) 1
II	調査に至る経緯と調査経過	3
1	発掘調査に至る経緯	(山本) 3
2	調査経過	(伊藤) 3
III	遺跡	(上條) 6
1	基本層序	6
2	遺構	6
IV	出土遺物	(尾野) 9
V	考察	(尾野) 28

## 挿 図 目 次

第1図	調査地点位置図	2
第2図	大学移転前の地形図	2
第3図	調査区位置図	5
第4図	灰層断面図	7
第5図	グリッド設定図	7
第6図	H-114号窯出土遺物実測図(1)	13
第7図	H-114号窯出土遺物実測図(2)	14
第8図	H-114号窯出土遺物実測図(3)	15
第9図	H-114号窯出土遺物実測図(4)	16
第10図	H-114号窯出土遺物実測図(5)	17
第11図	H-114号窯出土遺物実測図(6)	18
第12図	H-114号窯出土遺物実測図(7)	19
第13図	H-114号窯出土遺物実測図(8)	20
第14図	H-114号窯出土遺物実測図(9)	21
第15図	H-114号窯出土遺物実測図(10)	22
第16図	灰釉陶器から「山茶碗」移行期の椀B口径分布変遷図(1)	30
第17図	灰釉陶器から「山茶碗」移行期の椀B口径分布変遷図(2)	31
第18図	猿投窯・瀬戸窯・東濃窯併行関係模式図	32
第19図	暦年代推定資料実測図(1)	34
第20図	暦年代推定資料実測図(2)	35

## 表 目 次

表1	実測図掲載遺物一覧表	23
----	------------	----

## 写真図版目次

- 図版 1 遺跡 1 発見時遺跡近景  
2 灰層上面検出作業風景
- 図版 2 遺跡 1 灰層上面検出作業風景  
2 灰層上面検出作業風景
- 図版 3 遺跡 1 灰層上面検出状況（北より）  
2 灰層上面検出状況（東より）
- 図版 4 遺跡 1 灰層上面検出状況（南より）  
2 灰層掘り下げ作業風景
- 図版 5 遺跡 1 土層観察用ベルト  
2 土層観察用ベルト
- 図版 6 遺跡 1 6-10Y 4 Xライン灰層断面（東より）  
2 10-14Y 4 Xライン灰層断面（東より）
- 図版 7 遺跡 1 2-4 X10Yライン灰層断面（北より）  
2 10-12Y 4 Xライン灰層断面（東より）
- 図版 8 遺跡 1 完掘状況（北東より）  
2 完掘状況（東より）
- 図版 9 遺物（1）
- 図版10 遺物（2）
- 図版11 遺物（3）
- 図版12 遺物（4）
- 図版13 遺物（5）
- 図版14 遺物（6）
- 図版15 遺物（4）
- 図版16 遺物（8）

# I 遺跡の所在位置と環境

## 1 立地と自然環境

H-114号窯は、愛知県名古屋市千種区仁座町名古屋大学構内に所在する（第1図）。遺跡は、名古屋市東部にある東山丘陵から北に張り出した丘陵の東側斜面、標高約51mの地点に立地する。調査地周辺の地形は、大学施設の建設に伴う整地によって、著しく改変されているが、1950年代に行われた大学施設移転以前に作成された地形図（第2図）を参考にすると、鏡ヶ池付近から東南方向へのびる谷があったことが分かる。この谷の斜面沿いには、本窯址のほか、多くの窯址が発見されている。谷の長さは1kmほどで、鏡ヶ池から約600mのところまで南向きに伸びる谷と枝分かれしている。この南向きに伸びる谷は長さ250mほどで短く、その西斜面上に本窯址が形成されている。

遺跡周辺の自然環境は、現在アベマキ・コナラ・アカマツが混在する二次林となっている。大学が当地に移転してくる前も、現在と同様にアカマツが多く生育していたとみられるが、一部は戦前の炭焼きに伴う過度の伐採によって地表が露出していたらしい。（上條）

## 2 歴史的環境

愛知県のほぼ中央、やや北寄りに位置する猿投山（標高629m）の西南には、およそ20km四方の範囲にわたって、古代から中世にかけての窯跡1000基以上が分布している。猿投山西南麓古窯跡群、略して猿投窯と呼ばれるこの窯業生産に関わる一大生産遺跡群は、その分布のあり方から東山（H）・岩崎（I）・鳴海（N）・折戸（O）・黒笹（K）・井ヶ谷（IG）・瀬戸の7地区に区分されている。

今回調査の対象となった東山114号窯（以下、H-114号窯）は、この7地区のうち最も西側の東山地区に属する窯跡である。周辺一帯は平坦面の少ない丘陵地であるため、付近に窯跡以外の遺跡の存在はほとんど知られていないが、東山地区は猿投窯の中では最も早くから生産活動が認められている地区であり、H-114号窯の西約1.4kmに位置するH-111号窯など、操業時期が5世紀にまで遡る窯の存在も知られている。その後6～7世紀を通じて継続的に須恵器が焼かれていたが、7世紀後半に隣接する岩崎地区や鳴海地区に窯が築かれ始めると、東山地区での窯業生産は急速に衰え、8～9世紀の窯の分布は希薄となる。

しかし10世紀に入って隣接地区での生産が下火になると、あたかもこれと反比例するかのようになり、灰釉陶器窯が築かれ始め、東山地区での生産活動は再び活発化する。もっとも、この灰釉陶器生産も永くは続かず、10世紀の半ばには再び窯数が激減し、11世紀末に無施釉の陶器、いわゆる「山茶碗」の産地として復活するまで、東山地区での窯業生産は極めて低調となる。そして、12世紀には盛んに築かれた「山茶碗」窯も、13世紀に入るとほとんどその姿を消し、以後東山地区に多数の窯が築かれることはなかった。



第1図 調査地点位置図（国土地理院平成14年発行1/25,000地形図：名古屋南部による）



第2図 大学移転前の地形図（国土地理院昭和14年発行1/10,000地形図：東山による）

このように、東山地区での窯業生産は興隆と衰退を繰り返すが、その盛衰は多くの場合隣接地区の盛衰と裏腹の関係にある。こうした現象は、燃料とする薪を求めて陶工が移動し、森林資源が復活すると再び戻ってくることを示しているのではないかと考えられるが、結果として東山地区には、他地区には分布の希薄な時期の窯が集中していることに特徴がある。5～7世紀では、先述のH-111号窯をはじめとして、H-11号窯・H-61号窯・蝮ヶ池古窯・H-44号窯（光真寺古窯）・H-15号窯・H-50号窯・H-16号窯、10世紀の窯跡としてはH-72号窯など、猿投窯の編年研究上基準とされる窯跡は、枚挙にいとまがない。（尾野）

## II 調査に至る経緯と調査経過

### 1 発掘調査に至る経緯

名古屋大学東山地区において学術国際交流施設新設工事の計画が策定され、2002（平成14）年12月から工事が着工された。同施設建設予定地内には『名古屋市遺跡分布図（千種区）』に登録されている遺跡はないものの、その周辺には多数の窯跡の存在が周知されており、未確認の窯跡の破壊が懸念されていた。2003（平成15）年1月12日、そうした窯跡の破壊の有無を確認する目的で、名古屋大学大学院文学研究科博士前期課程1年の上條信彦氏（現九州大学大学院人文科学研究科博士課程後期2年）が日曜日のために工事が休止されていた建設現場を踏査し、掘削工事により破壊されている窯跡を発見した。

翌13日早朝に、大学事務局施設部と建設会社に対して即時の作業中止をもとめ、工事は中断されることになった。同日の午前中には、現状を記録するために平板測量と写真撮影をおこなった。また、調査指導を依頼した京都国立博物館の尾野善裕氏から現地指導をうけ、窯体はほとんど削平されてしまっているものの、灰原と煙出しが残存していることを確認した。14日午後、神尾美津雄文学研究科長・三谷倫生文学研究科事務長・山本の3名が施設部と今後の対応を協議し、翌15日の午前中に施設部職員2名と山本が名古屋市教育委員会におもむき、対策を協議した。その結果、1月20日から2月28日までの予定で緊急調査を実施することになった。また、出土した遺物が11世紀の百代寺窯式に比定される灰釉陶器であるとの認識から、窯跡にはH-114号窯と命名した。

なお、学術国際交流施設の建物が完成したあと、2001年にノーベル化学賞を受賞した野依良治特別教授にちなみ、その名称が「野依記念学術交流館」に変更された。現在、この学術交流館は国際会議の会場や外国人研究者の宿泊施設として活用されている。（山本）

### 2 調査経過

発見当時、H-114号窯は「野依記念学術交流館」建設に伴う土地造成面に、帯状に灰原（黒褐色土層）が露呈している状態であった。工事によって、既に地形は大きく改変（削平）を受



けていたものの、建設予定地内（4700㎡）には、H-114号窯の北北西と東側に若干自然地形が残っていた。そこで、まずこの部分について試掘を実施し、関連施設遺構や別の窯跡が遺存していないかを確認することとした。工事日程との関係上、試掘には重機を使用し、各試掘坑は洪積層（八事層）まで掘り下げたが、新たな遺構は全く検出されなかった。

また、「野依記念学術交流館」建設工事による削平範囲の西端崖面には、窯体の一部（煙出し）とみられる焼土が確認されていたが、窯体の遺存部分は建設予定地の外に当たっていた。このため、窯体については、測量して位置情報を記録するにとどめ、今回の調査では灰原（黒褐色土層）に重点を置くこととした。

本調査は、まず黒褐色土層の露出面の清掃から開始し、次に廃窯後に自然堆積したとみられる淡赤褐色土層を除去して、灰原（黒褐色土層）の範囲を把握することに努めた。その結果、灰原は比較的良好な状態で遺存しているものの、廃窯後の自然水流によって谷側の末端を浸食されていることが判明した。

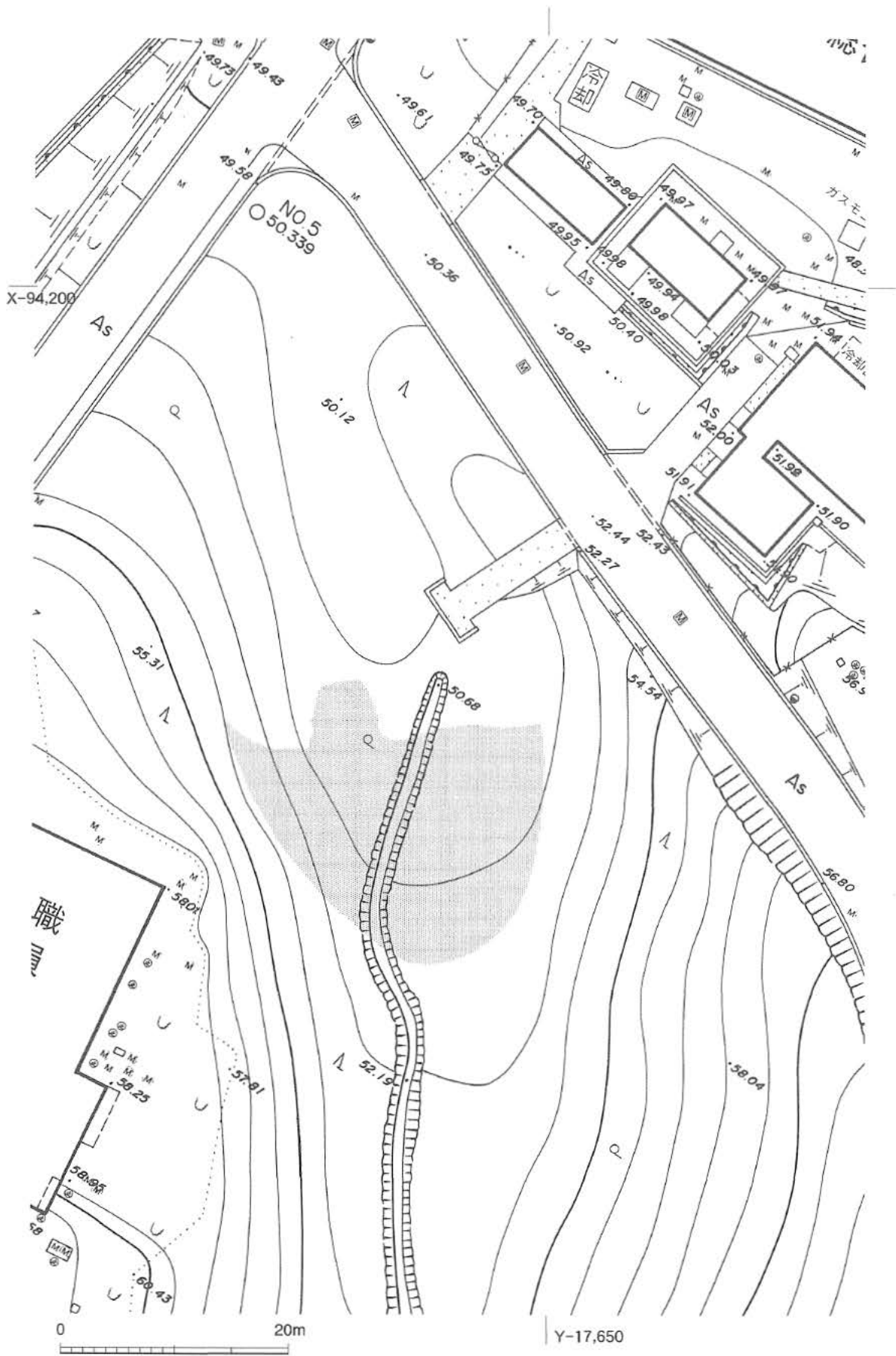
残存している灰原の範囲を確認した後、灰原の中央と残存窯体との中央を結ぶ軸線（10Yライン）を基準として、2m四方のグリッドを設定し、黒褐色土層の掘削をおこなった。黒褐色土層の掘削に際しては、4Xラインと10Yラインに沿って土層観察用のベルト（畔）を残し、これに沿う方向でサブトレンチを設けて地山まで掘り下げたが、特に間層は認められなかった。このため、黒褐色土層に含まれていた遺物については層位の細分を断念し、グリッドごと一括して取り上げることにした。

灰層完掘後、写真撮影・地形測量を実施し、2月7日には現地調査の全工程を終了した。

（伊藤）

#### 発掘調査日誌抄

- 1月20日～ 「野依記念学術交流館」建設予定地内の未削平部分試掘調査。灰原を覆う淡赤褐色土層を重機で除去。
- 1月24日～ グリッド設定。
- 1月28日～ 灰層を覆う淡赤褐色土層の残余を人力で除去し、灰原の範囲確認に努める。
- 1月30日～ 灰層掘削調査。灰層の下に、窯体掘り抜き排土とみられる砂利層を確認。
- 2月6日 灰層完掘。写真撮影。測量。
- 2月7日 周辺地形測量および撤収。



第3図 調査区位置図 (1/500)

### Ⅲ 遺 跡

#### 1 基本層序

調査区の層位は大きく5つに分かれる。第1層は腐植土層で、斜面部分で10～20cm、谷部分で15～30cm程堆積している。第2層は、淡赤色の礫層で、粘性はない。数cmのチャート円礫と花崗岩質の砂を多量に含むほか、陶器片を含んでいる。谷を埋めるように堆積し、調査区南部で約2mに達している。この層は八事層の流出土であり、本窯址灰原の末端を自然流路が侵食したのち、土石流となって短期間に谷を埋めたものとみられる。なお、この層から出土する遺物には、H-114号窯の焼成にかかるとは思われぬ須恵器や山茶碗が含まれており、それらの中には本窯址地点よりも山側から出土したものもあることから、谷筋に沿って山側に他の窯址が存在している可能性がある。第3層は後述する灰原に伴う灰層であり、多くの遺物や炭化物を含んでいる。

第4・5層は第四紀更新世前・中期の堆積層である。遺構は第4層上に形成されていた。第4層は、黄褐色のいわゆる八事層で、山側へ向かうにつれ厚く堆積している。第2層より粘性があり、数cm程の白色化したチャートの円礫や花崗質の砂を多く含むが、下位に行くほど白みが増し、シルトを多く含むようになる。第5層はいわゆる唐山層とみられ、工事に伴う削平範囲の西端崖面で厚さ3～5mである。上位には、砂を多く含むが、下位では、不純物をほとんど含まない白色の粘土層がみられた。土器・陶器用の粘土として最適なものが得られたと思われる。また、この第5層から湧水が確認できた。

#### 2 遺 構

灰原・土坑1基・煙道部とみられる窯体の一部を検出した。

##### (1) 灰 原

灰原は2 X～4 X・4 Y～16 Yに位置し、4.2×9.5mの長楕円形で谷に沿うように分布している。灰層上部は工事によって削平されている。灰原中央部6 X 4 Yグリットで窯体に向かって窪んでおり、前庭部と推定される。灰原は斜面から谷底にかけて傾斜し、窯廃絶後の自然流路の形成と第2層の流入によって下端部は失われていた。

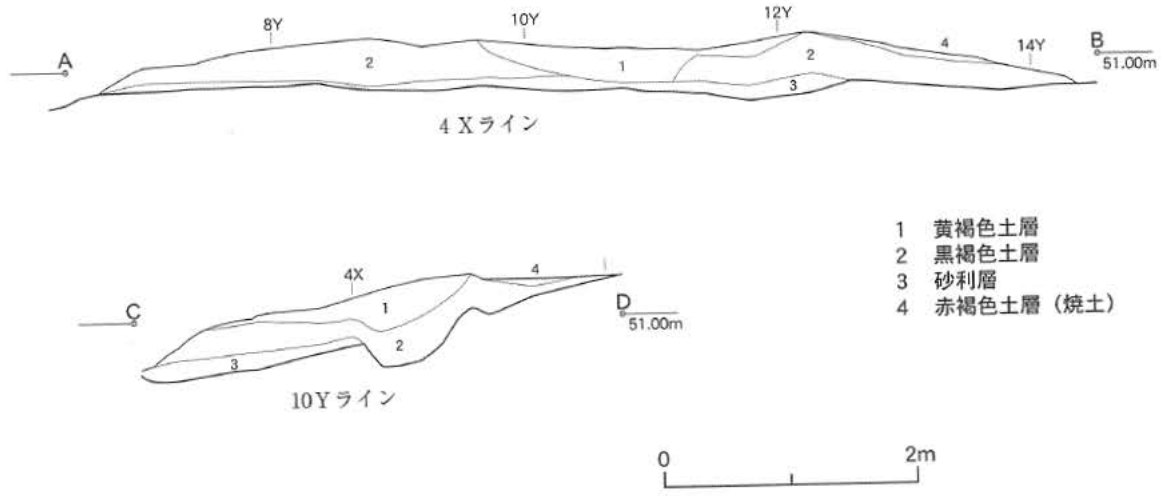
灰原の層序は3層からなる。

第1層 赤褐色土層（炭、焼土粒・塊を多量に含む。遺物は少ない。）

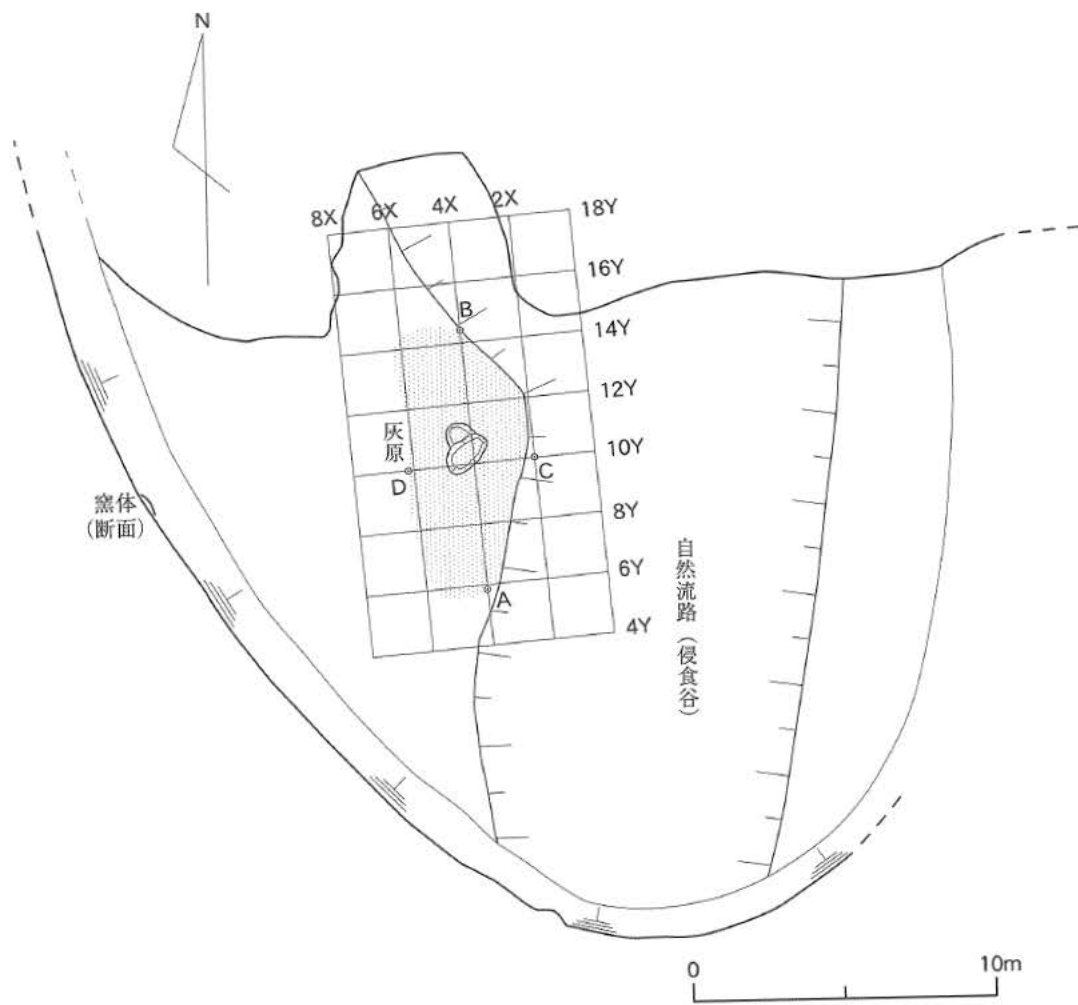
第2層 黒褐色土層（炭化物は1層よりは少ない。焼台片・陶器片を大量に含む。）

第3層 明褐色砂利層（径1cm前後の砂利を多量に含む。遺物はほとんどない。）

第1層は炭、焼土粒・塊を多量に含み、遺物は少ない。前庭部と推定される部分が最も厚く、この周囲100×60cmの範囲に堆積する。上面が削平されているため明確な厚さは分からないが、



第4図 灰層断面図 (1/60)



第5図 グリッド設定図 (1/250)

最大10cmである。第2層は最も遺物の密度が濃い部分である。厚さは4 X 10～12 Yグリット面で約40cmある。炭化材の量は第1層よりも少ないが、大形の丸材が散見される。下層の第3層は築窯時の掘抜排土であり、ほぼ第2層と同じ範囲に拡がり、厚さは6～15cmで、遺物は見られない。

## (2) 土 坑

灰原中央部6 X 10～12 Yグリットで検出された。150×90cmの楕円形の段状の底面を持ち、最大深30cmである。第2層黒褐色土層直下から、第3層および地山を掘り込んで形成されている。層位や遺物は、灰原第2層と同じである。このことから、築窯時に形成されたのち、操業による第2層形成と同時に埋没したものとみられる。

## (3) 窯 体

窯体は、工事に伴う削平範囲の西端崖面に断面が観察でき、一部は工事範囲外にのびる。足場確保が極めて難しい位置にあり、作業上の安全確保ができないことと、残存窯体自体を崩落させてしまう危険性を考慮して、発掘調査は行わず、断面の観察と測量のみを行った。

灰原の西側に位置し、前庭部から残存窯体までは、水平距離で7.4m、垂直距離で2.5mである。崖面で確認できた窯体断面は幅100cm、深さ15cmの下部が弧をなす半月状をなす。地山の被熱部分である赤褐色土が厚さ15～20cmに拡がっている。遺物・窯道具はみられない。以上を考慮するとその位置と大きさから煙道部とみられる。

すでに窯体の大半が削平されてしまっているため、窯構造の詳細については知りえないが、可能な範囲で規模・構造を推定したい。前庭部から、残存窯体までは、水平距離で7.4m、垂直距離で2.5mあることから、窯体の全長は7.8m前後、床面傾斜角は約32度となる。しかし、実際は、燃焼部など勾配の緩やかな部分の存在も考慮する必要もあるので、焼成部の床面傾斜角はもう少し急勾配であっただろう。田口昭二氏の研究によると白瓷（灰釉陶器）の窯は、全長5～8m、幅1～1.5m、床面傾斜角は35～45度であるのに対して、山茶碗の窯は、全長9～13m、最大幅は2～3m、床面傾斜角は20～30度程となり、白瓷窯よりも床面の勾配が緩やかになるようである（田口1983）。本窯址は、旧地形から考えても、床面傾斜角は、30度以下になるとは考えがたいことから、どちらかといえば美濃窯の白瓷窯に近い構造の窯でなかったかと思われる。

(上條)

## IV 出土遺物

今回の調査で得られた遺物は、その大半がH-114号窯の操業に伴って、焚口前に形成されたと考えられる焼成不良品廃棄場所としての灰層（黒褐色土層・赤褐色土層）から出土したものである。黒褐色土層を覆う黄褐色土層や、灰原の末端を切る浸食谷の埋土の中からも若干量の遺物が採集されているが、灰層出土遺物との間に顕著な差異は認められず、層位的な関係からみても、基本的に灰層中の遺物が流出・再堆積したものと考えられる。したがって、ここでは特に出土位置・出土層位にこだわることなく、調査区内出土遺物全体を一まとめにして取り扱うこととする。

さて、出土遺物の中でもその大半を占めているのは、明灰褐色ないし明灰白色を呈する陶器の一群で、過去の研究では通常「灰釉陶器」と呼ばれてきたものである。もっとも、H-114号窯の出土遺物については、後述するようにごく一部の器形を除いて明確な人工施釉痕跡が認められないため、人工施釉を思わせる「灰釉陶器」という呼称を用いることに、いささかの抵抗を感じないではない。こうした、無施釉の陶器と人工的に施釉された陶器（灰釉陶器）の共存については既に注意が向けられており、無施釉の陶器を「灰釉系陶器」と呼称する研究（斎藤1983）もある。しかしながら、「灰釉系陶器」の用語については、俗に「山茶碗」と呼称される中世の無施釉陶器を指して用いられた先行事例（宇野ほか1978）が存在している。また、後に「灰釉陶器」と中世の無釉化した陶器「山茶碗」の総称としての用法が提唱される（赤塚1987）など、「灰釉系陶器」の用語法をめぐっては、いささか混沌とした状況にある。これらの用語法には、それぞれ長所・短所があり、一概にどの用法が良いとも決めがたいため、以下本稿では学史と慣例を尊重し、明らかに無施釉のものも含めて、これら一群の陶器を便宜的に「灰釉陶器」と呼称することとする。

H-114号窯からの出土遺物には、「灰釉陶器」のほかに窯道具とごく少量の須恵器がある。木炭（炭化材）も少なからず採集されているが、樹種同定その他の調査が未了であるため、本書での報告対象からは除外している。

### (1) 「灰釉陶器」

椀B・玉縁状口縁椀・片口椀・深椀・段皿・稜皿・耳皿・鉢・蓋・広口瓶・壺・甕などの器形（器種）があり、椀B・玉縁状口縁椀には大小の法量分化が認められる。

#### 椀B（第6～12図1～183・185～196）

緩やかに外反する口縁をもつ付高台の椀形態で、口径の規格性から16cm前後（1類）・11cm前後（2類）・9cm前後（3類）の3群に分けられる。いずれも特に底裏に削りなど調整は施されておらず、大半にロクロからの切り離し痕跡である回転糸切り痕が認められる。多くの個体に自然釉が降下しているが、明確な人工施釉の痕跡は認められない。

1類（1～162） 口径16cm前後、器高6cm前後、高台径7～8cm前後。1類の椀Bの中に

は、口縁の4箇所を軽く摘むように指で撫で上げて、輪花が施されているものが少なからず含まれており、図化したものでは約37%の個体に輪花が確認される。口縁部の残存率の低い個体の中には、輪花部分が欠落しているものもあると考えられるので、輪花の実質的な施文率はおそらく4割を越えていたであろう。また、輪花とは別に口縁内面に沈線が巡らされているものが少数あり(10・99~102)、図示した以外にも数個体分が出土している。

2類(170~183・185~196) 口径11cm前後、器高3~4cm前後、高台径5cm前後。約3割の個体の口縁に、1類と同様の輪花が施されているが、口縁内面に沈線をもつものは確認されなかった。

3類(163~169) 口径9cm前後、器高3cm前後、高台径5cm前後。輪花や口縁内面に沈線が施されているものは、確認されなかった。

#### 玉縁状口縁碗(第12図197~208)

中国製の白磁の玉縁状口縁碗を模倣したと考えられる形態の碗で、高台は付高台。口径の規格性から、17cm前後(1類)と11cm前後(2類)の2群に分類される。底裏には、ロクロからの切り離し痕跡である回転糸切り痕が残るものが少なくない。碗Bと同様に、明確な人工施釉の確認される個体は認められない。

1類(197・198) 口径17cm前後、器高7.5cm前後、高台径6cm前後。全体の形状は1類の碗Bと非常に似通っているが、膨らみを持たせた口縁の外表面やや下寄りを強く撫でて、独特の形状の口縁が造り出されている。

2類(199~208) 口径11cm前後、器高4cm前後、高台径4cm前後。1類の玉縁状口縁碗と同様に、膨らみを持たせた口縁の外表面やや下寄りを強く撫でて、独特の形状の口縁が造り出されている。

#### 片口碗(第12図184)

口径12.2cm、器高3.6cm、高台径6.3cm。2類よりも一回り口径の大きい碗Bの口縁に注ぎ口を付けた形状のもの。1個体のみ出土で、内全面に厚く自然釉が降下しているが、人工施釉の痕跡は認められない。

#### 深碗(第12図209・210)

口径7.8~8.0cm、器高2.9~3.9cm、高台径4.1cm。3類の碗Bに似るが、腰部分の張りが強く、全体にやや深めで、口径も一回り小さい。碗Bと同様に付高台だが、高台はやや高めで、撫で付け作業も丁寧に行われている。高台径からみて、後述の段皿と組み合わせられるものと考えられる。出土量は少なく、2個体分を確認したにとどまる。いずれにも自然釉が降下しているが、明確な人工施釉の痕跡は認められない。

#### 段皿（第12図212）

口径7.6cm、器高2.9cm、高台径3.8cm。見込みに直径4cm強の不明瞭な段を有する付高台の皿。1個体のみ出土で、内全面に自然釉が降下しているが、明瞭な人工施釉の痕跡は確認できない。出土量の僅少さや、見込みの段の直径などから判断して、前述の深椀と組み合わせて、密教法具の六器として用いるべく製作されたものかと思われる。

#### 稜皿（第12図213～226）

口径10～11cm前後、器高2～3cm、高台径5.5cm前後。椀Bの2類に似た付高台の器形だが、腰部が弱く屈曲し、内面の体部と底部の境界に凹線状の谷線が巡らされている。器高もやや低めである。大半の個体に自然釉が降下しているが、明確な人工施釉の痕跡は認められない。

#### 耳皿（第12図211）

残存高3.2cm、高台径4.4cm。口径9.2cmほどの高い付高台の皿の口縁2箇所を上方へ屈曲させた形状のもの。1個体のみ出土で、明瞭な人工施釉の痕跡は確認できない。

#### 鉢（第15図242・243）

椀を大型化した形状の器と推定されるもので、小破片のため正確な口径は不明だが、おおよそ30cm前後であろう。椀Bと同様に口縁がやや外反しているもの（242）と、玉縁状口縁椀と同様の口縁形態のもの（243）がある。いずれにも、明確な人工施釉の痕跡は認められない。

#### 蓋（第15図241）

口径6.7cm、残存高1.5cm。1個体のみ出土で、鈕を欠き、対応する身も出土していないが、口径から合子もしくは小壺の蓋と考えられる。上面に厚く自然釉が降下しているが、明瞭な人工施釉の痕跡は確認できない。

#### 広口瓶（第13図227～234）

口径20cm前後、推定器高28cm前後、高台径12cm前後。高台は付高台で、口縁端部は受け口状に作られている。口縁に向かって大きくラップ状に広がる頸部は、胴部と直に接合されている。いわゆる「二段構成」である。胴部は、紐土巻き上げもしくは紐輪積みした後、ロクロ回転を利用して水挽き成形されており、外面腰部に外ゴテを当てた痕跡が残る。叩き工具の使用痕跡は特に認められない。焼台として再利用されているものが少なくなく、いずれも自然釉の降下が激しいため、人工施釉の有無については明確でない。

#### 壺（第13図235・236）

口径15cm前後、推定器高36cm前後、底径30cm前後。平底で、広口瓶と較べると寸詰まりの



短い頸部をもつ壺。胴部径は一回り大きい、広口瓶と同様の手法で成形されている。自然釉の降下が著しく、人工施釉の有無については明確でない。

#### 甕（第14・15図237～240）

口径30cm前後、推定器高50cm前後、推定底径32cm前後。平底で、胴部外面に叩き成形の工具痕跡（平行タタキ）が残っている点で異なるが、全体の形状は広口瓶と類似している。頸部には自然釉の降下が激しく、人工施釉の有無については定かでないが、238の胴部外面には、刷毛塗りとみられる灰釉が塗布されている。また、内面にも施釉時に刷毛から垂れたと見られる灰釉の滴の痕跡が斑点状に認められる。

#### （2）窯道具

傾斜した窯（焼成室）の床面に器物を据え付ける際に用いられた支持具としての焼台が多数出土している。いわゆる「馬爪焼台」で、下面は窯の床面の傾斜に合わせて傾けられている。意図的に粗い砂粒を混ぜた粘土で作られており、焼き締まりは悪い。窯詰めの際には焼台の上に直接器物を据えていたと考えられ、上面に重ね焼きされた椀Bの熔着している事例も多数出土している。

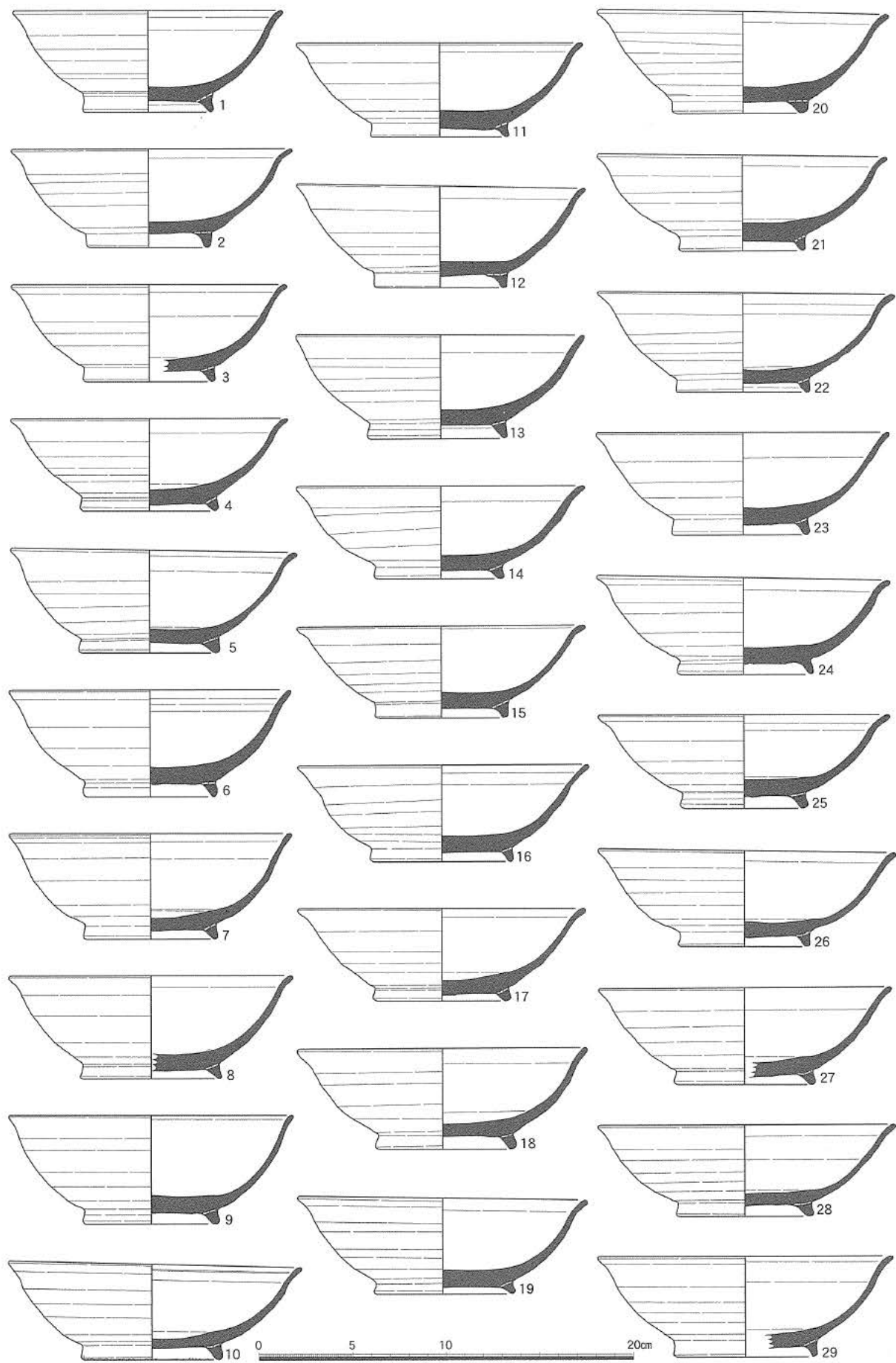
「馬爪焼台」以外には、焼成不良品を焼台に転用したと見られる例が散見される程度で、特に専用の窯道具は認められなかった。

#### （3）須恵器（第15図224～246）

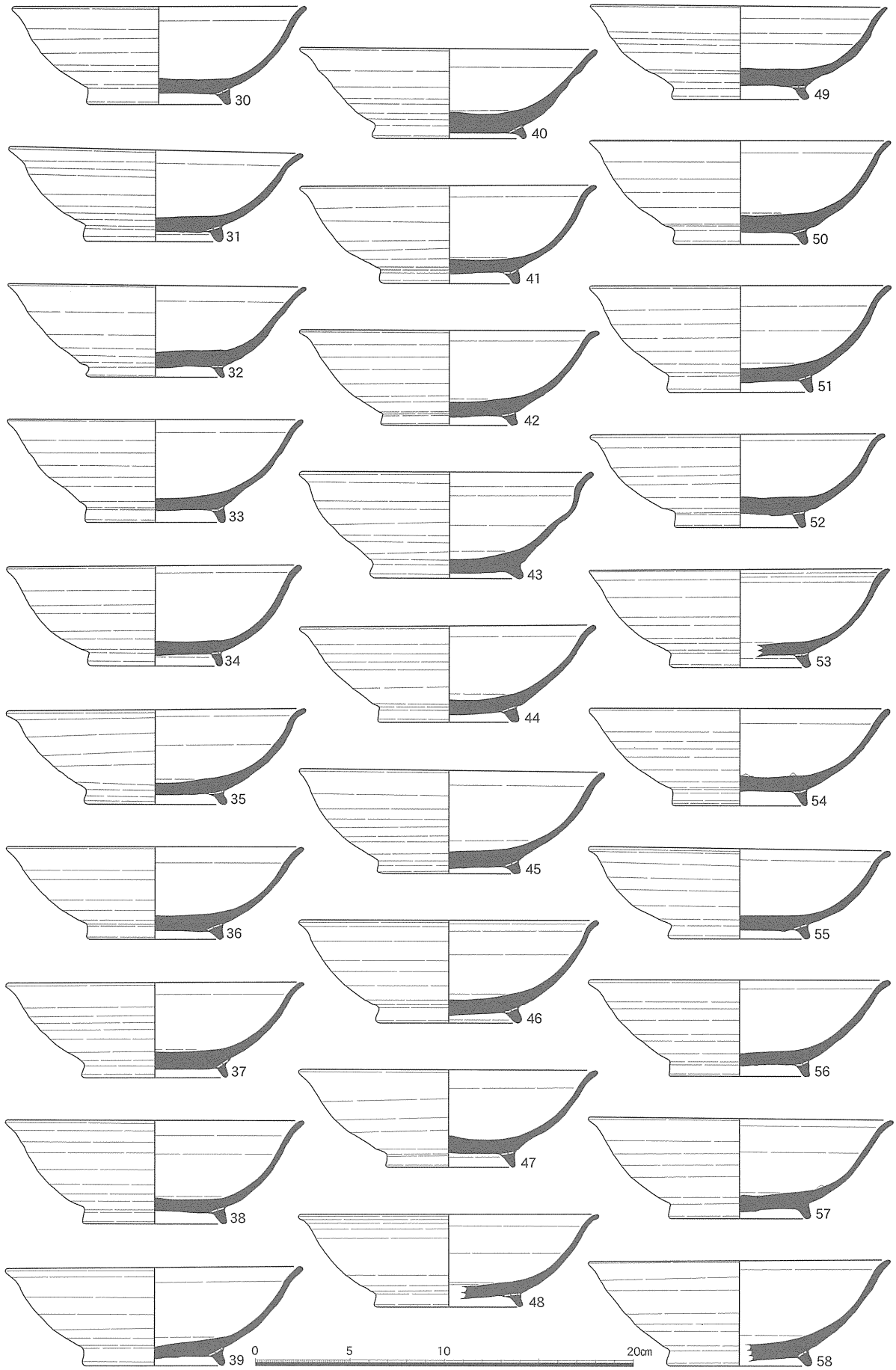
暗灰色を呈し、比較的硬質の焼き上がりを示す。245・246は、提瓶の胴部片とみられ、245の外面にはカキ目調整が施されている。一方、246の外面には二重の圈線（凹線）が施文されている。244は、瓶類（提瓶か）の頸部で、外面中位に一段凹線が巡らされているが、やや不明瞭である。

これらの須恵器は、特に調査区内の特定の場所から出土したものではないが、形質的特徴から古墳時代に遡るものと考えられ、後述するH-114号窯の操業時期とは大きく隔たっている。おそらく、近在の古い時期（古墳時代）の窯跡から流出した須恵器が紛れ込んだものであろうが、H-61号窯をはじめとして、H-114号窯の近辺で知られている古墳時代の窯跡は、いずれもH-114号窯より谷側に位置しており、それらの窯跡から山側へ遺物が自然流出する可能性は極めて低いと考えられる。したがって、これらの須恵器片の存在は、H-114号窯よりも山側（谷奥部）に、未知の古墳時代須恵器窯跡の存在を示唆するものと評価できよう。

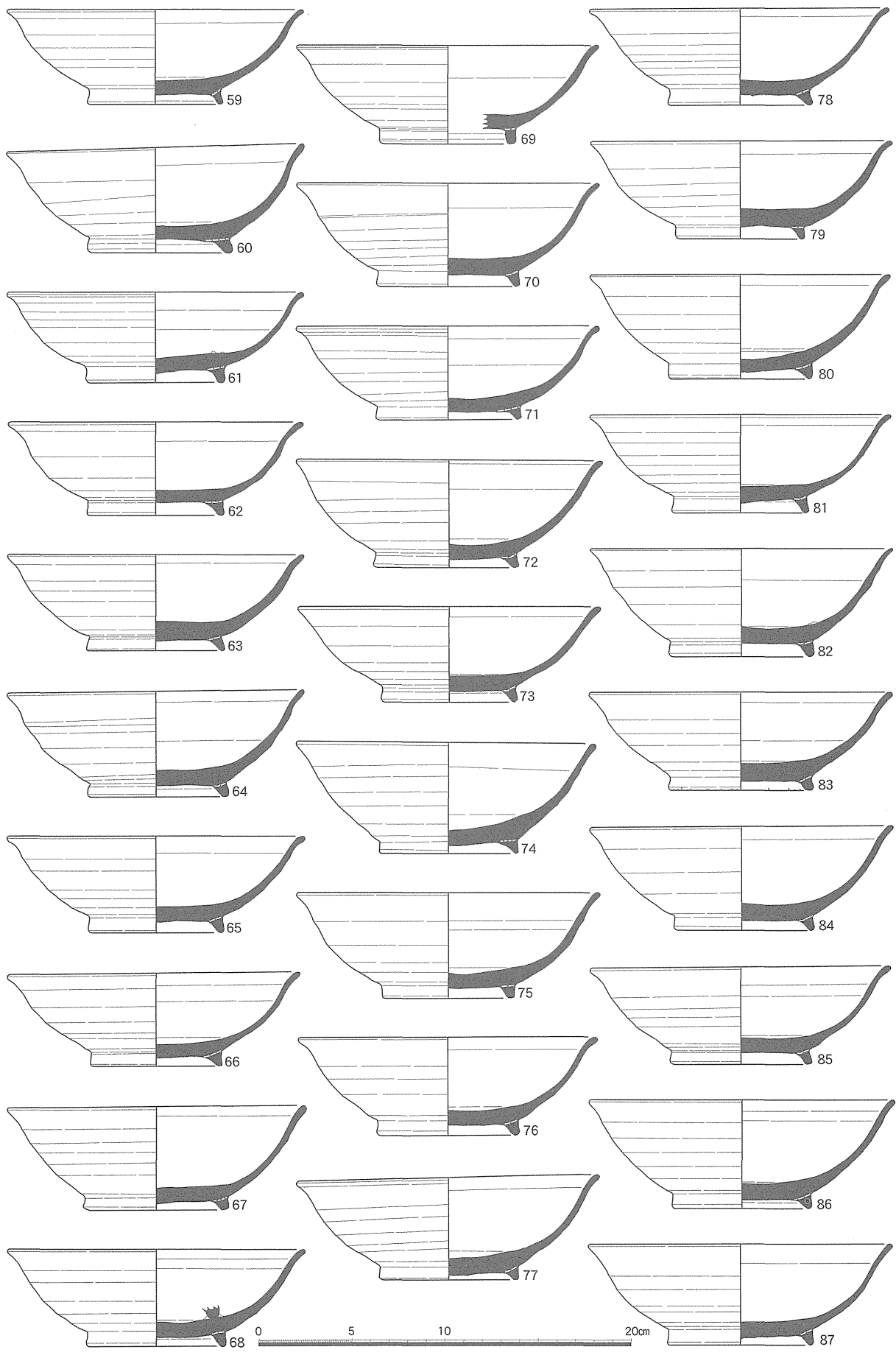
（尾野）



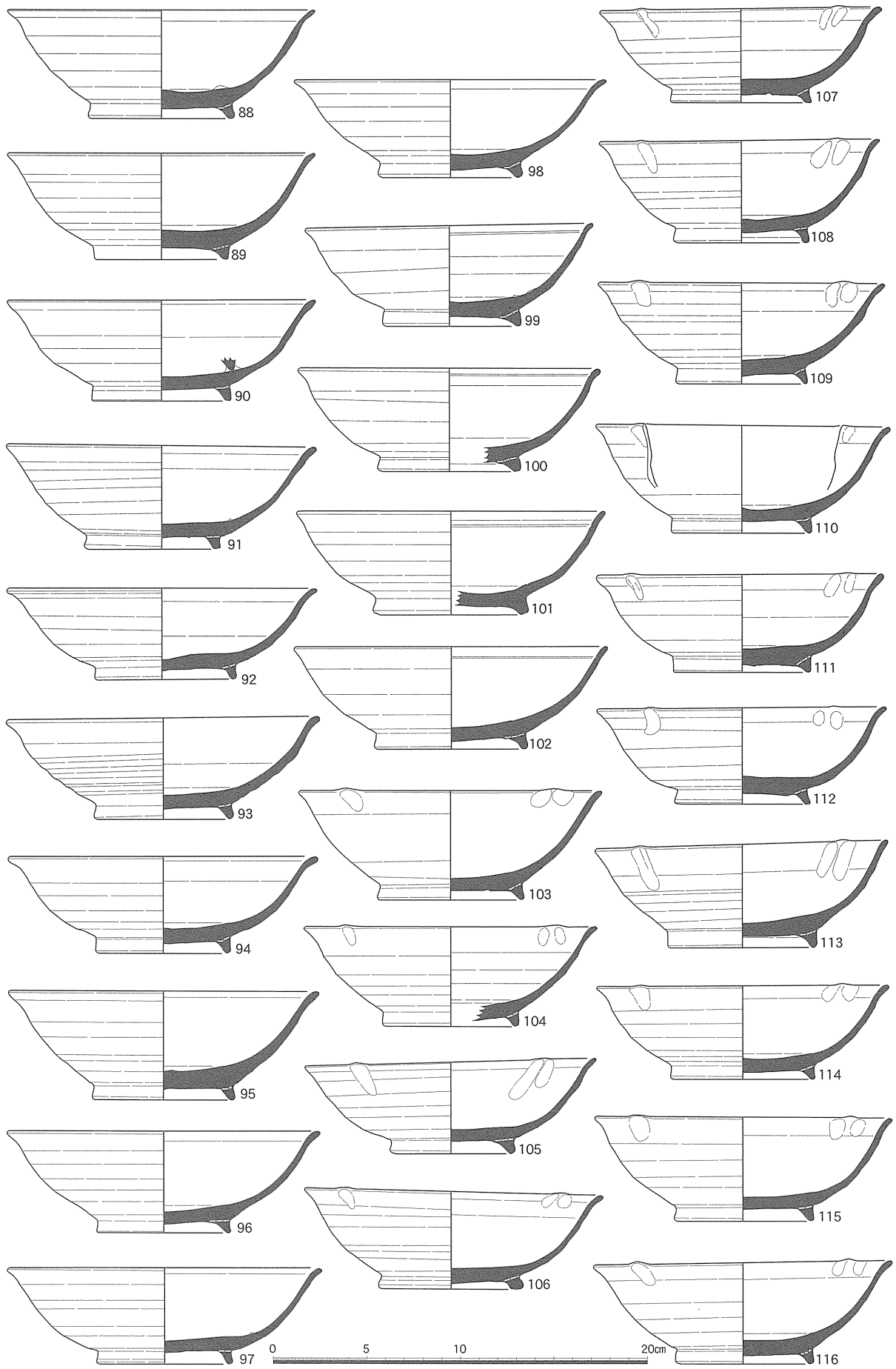
第6图 H-114号窑出土遗物实测图(1)



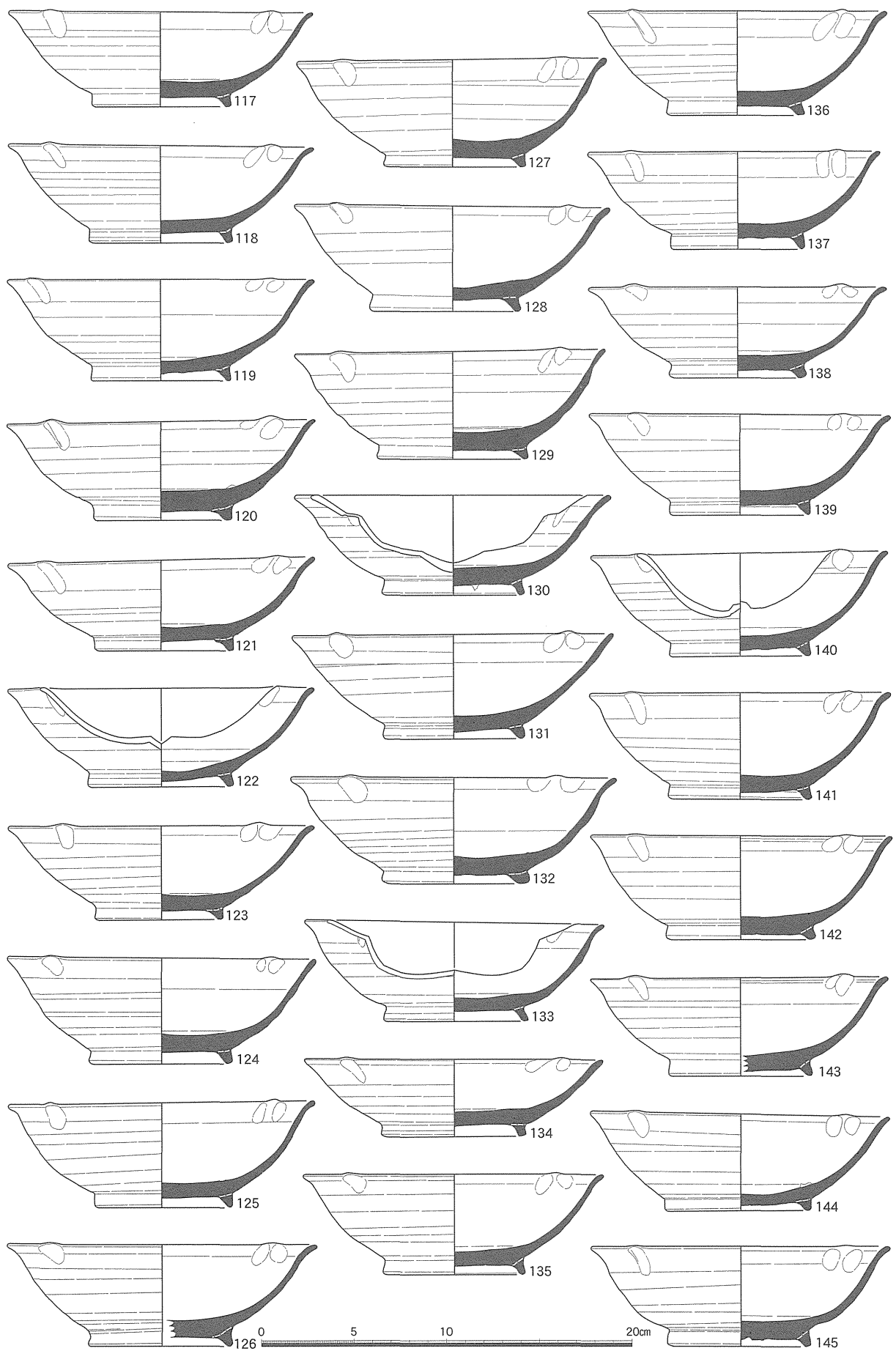
第7图 H-114号窑出土遗物实测图(2)



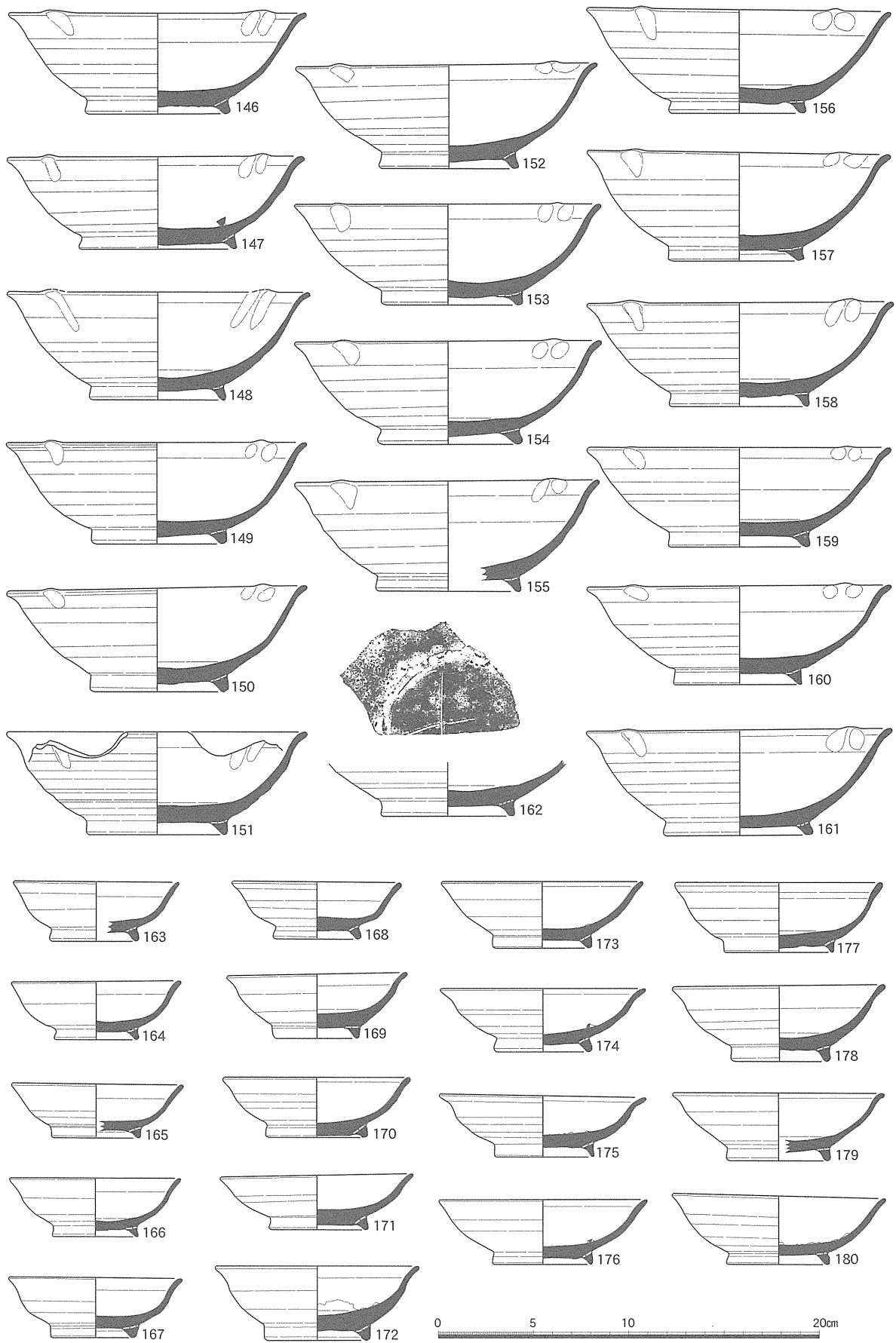
第8图 H-114号窑出土遗物实测图(3)



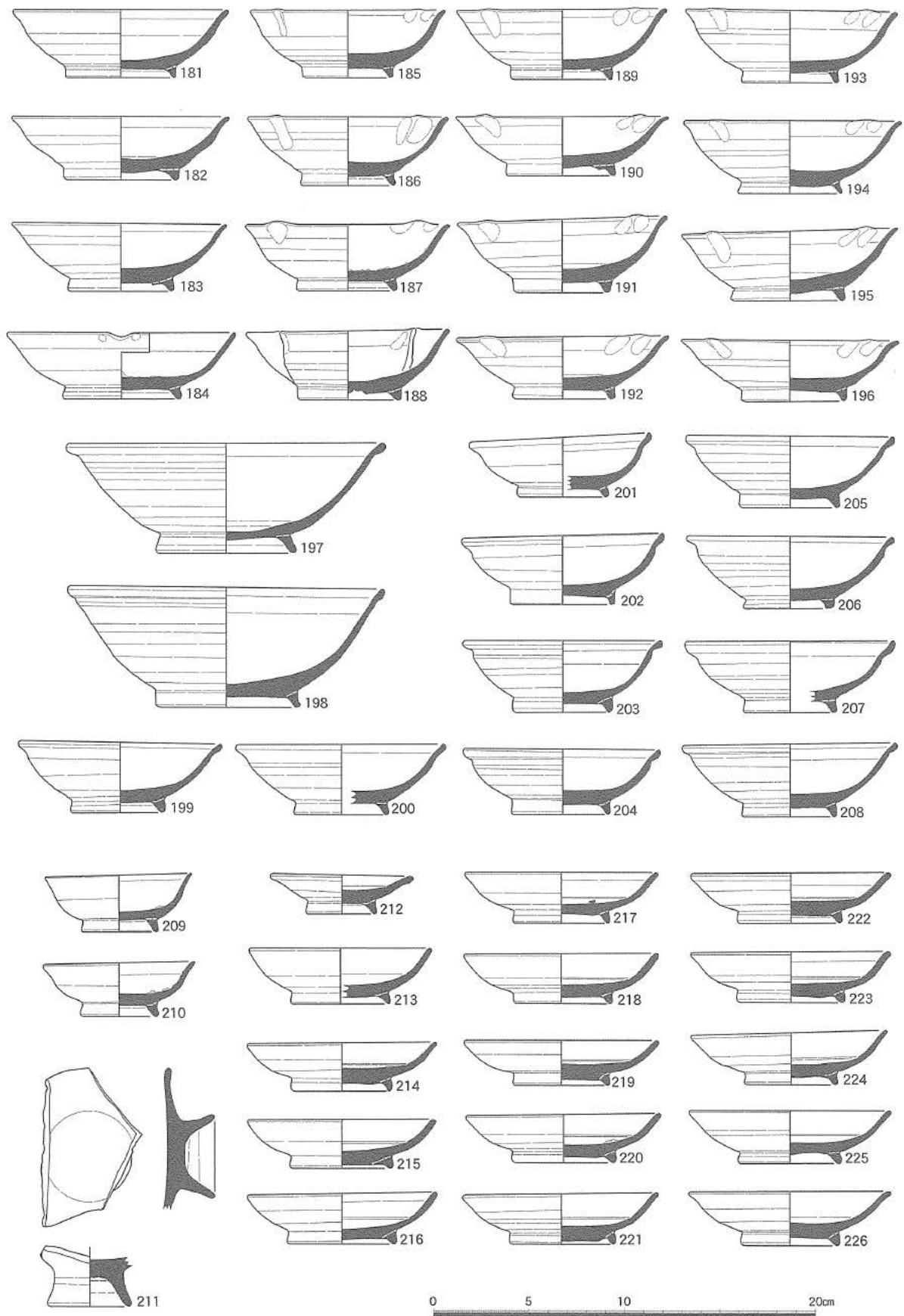
第9图 H-114号窯出土遺物実測図(4)



第10图 H-114号窑出土遗物实测图(5)

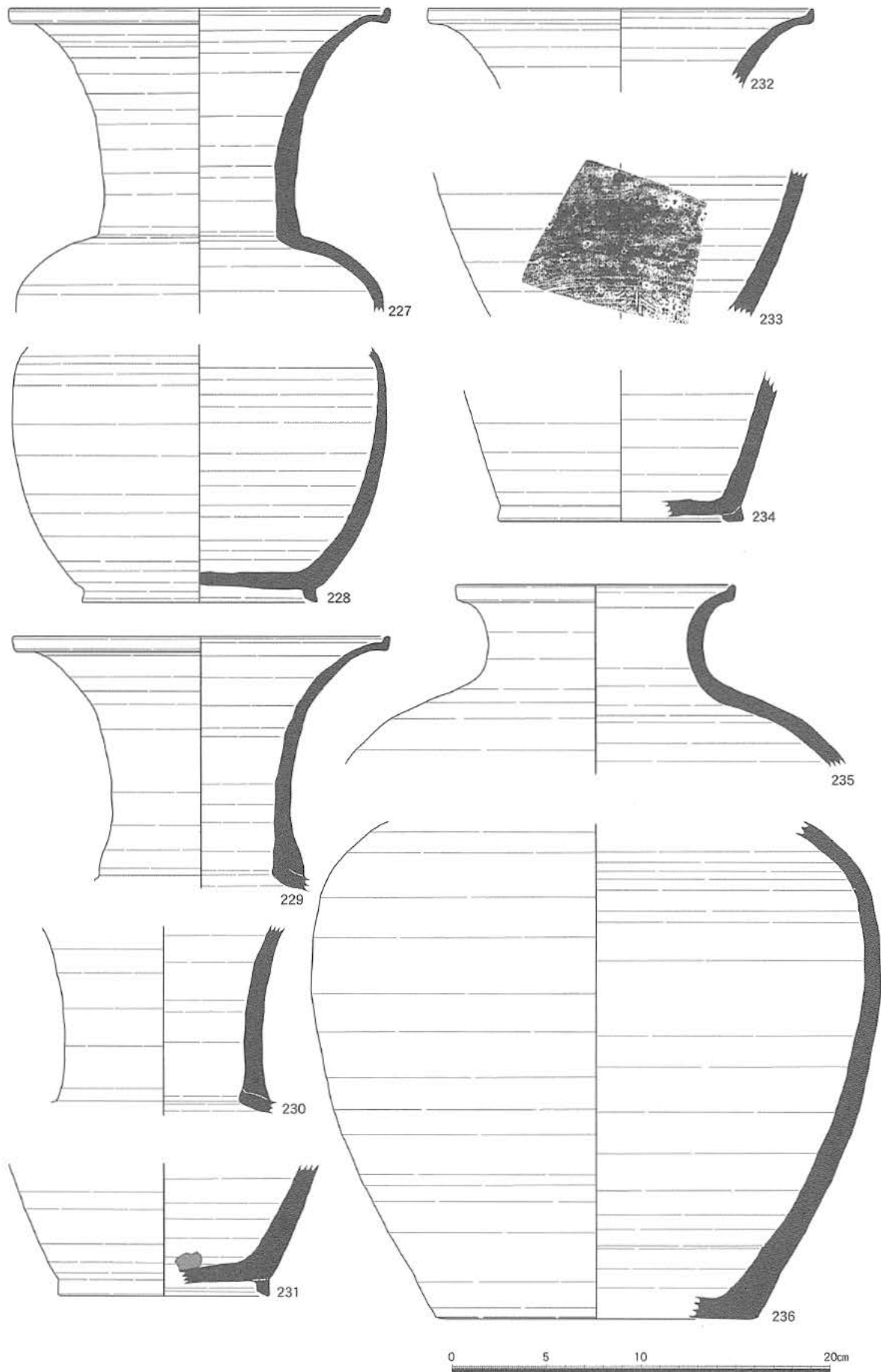


第11图 H-114号窑出土遗物实测图(6)

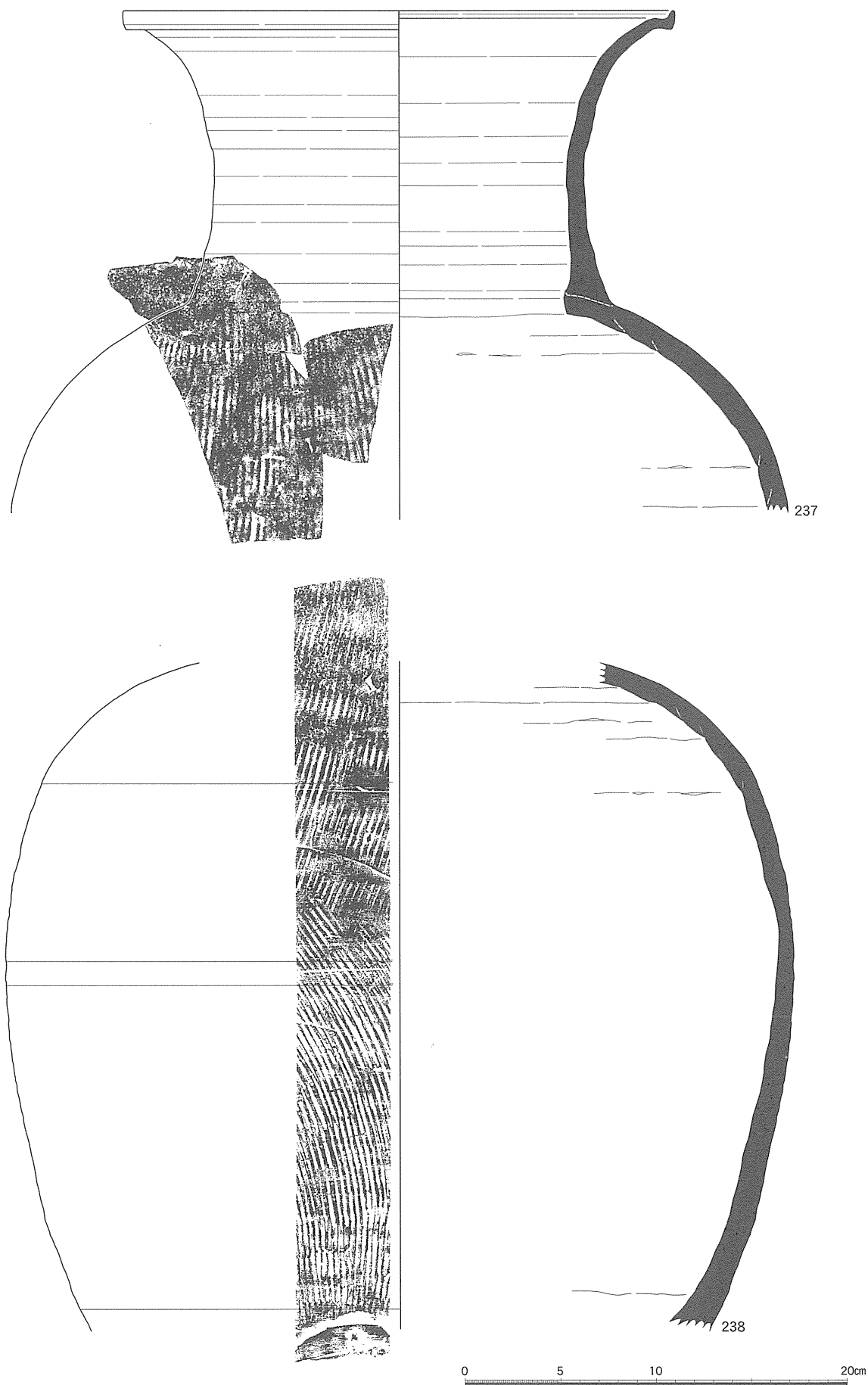


第12图 H-114号窑出土遗物实测图(7)

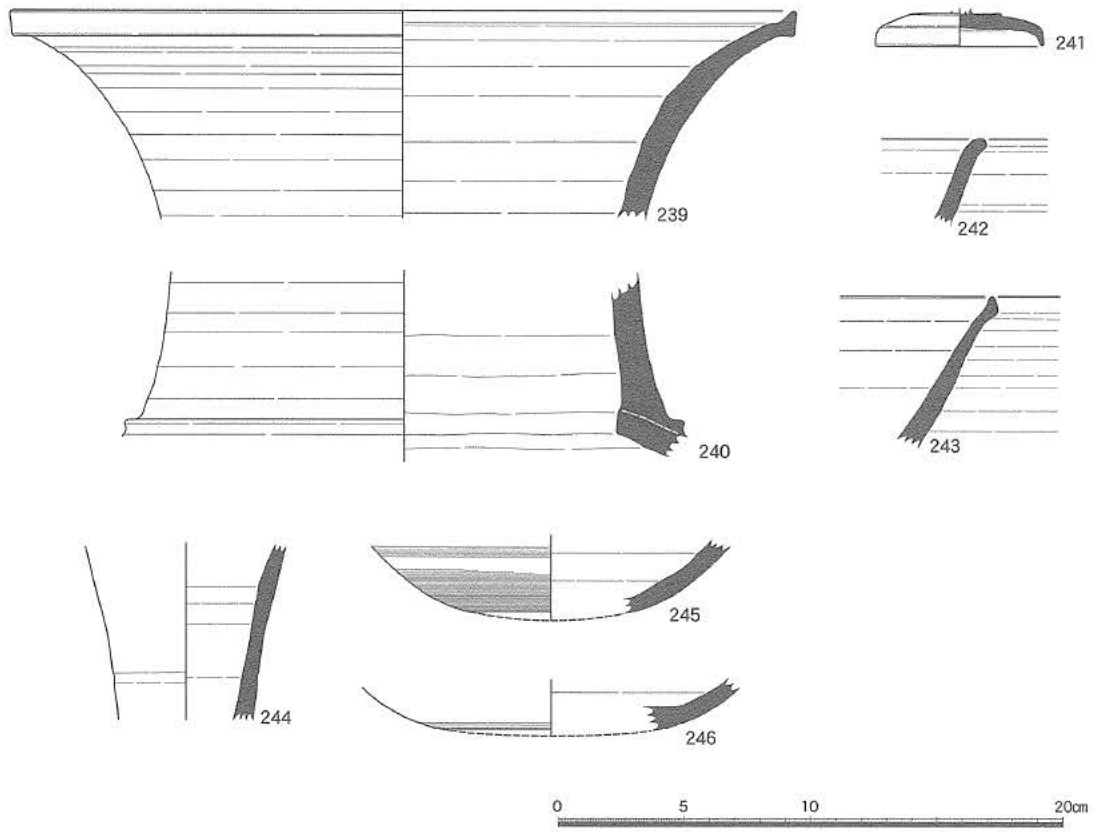




第13图 H-114号窑出土遗物实测图(8)



第14图 H-114号窯出土遺物実測図(9)



第15图 H-114号窟出土遗物实测图 (10)

表1 実測図掲載遺物一覧表

図No.	実測No.	器形	出土グリッド	出土層位	口径	胴径	高台径	器高	備 考
1	121	椀 B	2-4X8-10Y	黒褐色土層	14.8		7.1	5.5	内面に重ね焼き痕
2	117	椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	15.4		6.8	5.4	内面に重ね焼き痕
3	217	椀 B	4-6X10-12Y	黒褐色土層	14.8		7.1	5.2	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
4	166	椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	15.1		7.5	5	内面に重ね焼き痕
5	118	椀 B	4-6X12Y ライン畦	黒褐色土層	15.7		7.7	5.7	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
6	106	椀 B	4-6X6-8Y	黒褐色土層	15.4		7.3	5.8	内面に重ね焼き痕
7	220	椀 B	4-6X8-10Y	黒褐色土層	15.1		7.2	5.6	内面に重ね焼き痕、高台内に乾燥切れ撫で付け痕
8	127	椀 B	4X ライン畦 10-12Y	黒褐色土層	15.5		7.7	5.7	内面に重ね焼き痕、割れ口研磨
9	164	椀 B	4X ライン畦 12-14Y	黒褐色土層	15.3		7.3	5.8	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
10	137	椀 B	4-6X10-12Y	黒褐色土層	16		7.7	5.4	内面に重ね焼き痕、畳付に粉殻痕、見込みにシッタ疵
11	219	椀 B	2-4X10-12Y	黒褐色土層	15.3		7.4	5	内面に重ね焼き痕、割れ口研磨、見込みにシッタ疵
12	186	椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	15.5		7.1	5.5	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
13	26	椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	15.4		7.5	5.6	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
14	5	椀 B	4-6X8Y ライン畦	黒褐色土層	15.4		6.9	5	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
15	48	椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	15.4		7.2	5	内面に重ね焼き痕、底裏に板状圧痕
16	211	椀 B	2-4X8-10Y	黒褐色土層	15.6		7.7	5.2	内全面降灰、重ね焼き最上段、割れ口研磨、高台内に乾燥切れ撫で付け痕
17	115	椀 B	4X ライン畦 12-14Y	黒褐色土層	15.7		7.5	5	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵、高台内に乾燥切れ撫で付け痕
18	18	椀 B	2-4X10-12Y	黒褐色土層	15.5		7.6	5.4	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
19	11	椀 B	4-6X8Y ライン畦	黒褐色土層	15.7		7.6	5.3	内面に重ね焼き痕
20	13	椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	15.6		7.3	5.6	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
21	29	椀 B	4-6X8-10Y	黒褐色土層	15.5		6.8	5.2	内面に重ね焼き痕
22	136	椀 B	2-4X6-8Y	黒褐色土層	16.2		7.3	5.4	内面に重ね焼き痕、割れ口研磨、見込みにシッタ疵
23	38	椀 B	4-6X10-12Y	黒褐色土層	15.7		7.4	5.4	内面に重ね焼き痕
24	12	椀 B	4X ライン畦 8-10Y	黒褐色土層	15.9		7.4	5.4	内面に重ね焼き痕
25	119	椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	15.9		7	5.1	内面に重ね焼き痕、高台内に乾燥切れ撫で付け痕
26	126	椀 B	4-6X12Y ライン畦	黒褐色土層	16.3		7.2	5.3	内面に重ね焼き痕
27	175	椀 B	4-6X6-8Y	黒褐色土層	15.7		7.6	5.2	内面に重ね焼き痕、割れ口研磨
28	176	椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	16		7.4	5	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
29	174	椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	15.9		7.7	5.4	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
30	180	椀 B	4-6X10-12Y	黒褐色土層	15.7		7.7	5.2	内面に重ね焼き痕
31	239	椀 B	4-6X12Y ライン畦	黒褐色土層	15.6		7.4	5	内全面降灰、重ね焼き最上段、底裏に板状圧痕
32	178	椀 B	4-6X12Y ライン畦	黒褐色土層	16.2		7.6	5	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
33	190	椀 B	4-6X12Y ライン畦	黒褐色土層	16		7.6	5.6	内面に重ね焼き痕
34	125	椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	16		7.3	5.5	内面に重ね焼き痕、割れ口研磨、見込みにシッタ疵
35	204	椀 B	4-6X8Y ライン畦	黒褐色土層	15.9		7.7	5.1	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
36	210	椀 B	4-6X8-10Y	黒褐色土層	15.8		7.3	4.9	内面に重ね焼き痕
37	182	椀 B	4X ライン畦 8-10Y	黒褐色土層	15.9		7.8	5.1	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
38	168	椀 B	4-6X12Y ライン畦	黒褐色土層	15.9		7.7	5.5	内面に重ね焼き痕
39	37	椀 B	2-4X10Y ライン畦	黒褐色土層	15.8		7.5	5.3	内面に重ね焼き痕、高台内に乾燥切れ撫で付け痕
40	179	椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	15.8		8.2	4.9	内面に重ね焼き痕、割れ口研磨
41	185	椀 B	4-6X10-12Y	黒褐色土層	15.8		7.5	5.2	内面に重ね焼き痕、割れ口研磨
42	187	椀 B	2-4X10-12Y	黒褐色土層	16.2		7.4	5.1	内面に重ね焼き痕、割れ口研磨、高台内に乾燥切れ撫で付け痕
43	16	椀 B	2-4X10Y ライン畦	黒褐色土層	15.6		8.1	5.7	内面に重ね焼き痕
44	234	椀 B	4X ライン畦 12-14Y	黒褐色土層	15.7		7.5	5.1	内面に重ね焼き痕
45	221	椀 B	6-8X12-14Y	黒褐色土層	16.2		7.6	5.6	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
46	212	椀 B	2-4X12-14Y	黒褐色土層	15.9		7.7	5.5	内面に重ね焼き痕、底裏に焼台付着、粉殻痕跡、底裏に板状圧痕
47	9	椀 B	4-6X10-12Y	黒褐色土層	15.8		6.9	5.2	内面に重ね焼き痕
48	83	椀 B	4-6X10-12Y	黒褐色土層	16.2		8	5	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
49	123	椀 B	4X ライン畦 12-14Y	黒褐色土層	16.1		7.4	5.1	内面に重ね焼き痕、割れ口研磨、見込みにシッタ疵
50	120	椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	16.3		7.3	5.6	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵

図No	実測No	器形	出土グリッド	出土層位	口径	胴径	高台径	器高	備考
51	17	椀 B	4-6X8-10Y	黒褐色土層	16		7.8	5.7	内面に重ね焼き痕
52	205	椀 B	4X ライン畦 6-8Y	黒褐色土層	15.6		7	5	内面に重ね焼き痕
53	230	椀 B	4-6X6-8Y	黒褐色土層	16		7.5	5.3	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
54	191	椀 B	4-6X10-12Y	黒褐色土層	16		7.2	5.2	内全面降灰、重ね焼き最上段
55	7	椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	16		7.5	4.9	内面に重ね焼き痕
56	203	椀 B	6-8X12-14Y	黒褐色土層	16.1		7.5	5.1	内面に重ね焼き痕、割れ口研磨、
57	138	椀 B	4-6X8-10Y	黒褐色土層	16.5		7.7	5.4	内面に重ね焼き痕
58	208	椀 B	2-4X12-14Y	黒褐色土層	16		7.7	5.6	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
59	209	椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	16		7.3	5.1	内面に重ね焼き痕
60	184	椀 B	2-4X8-10Y	黒褐色土層	16.1		7.9	5.9	内面に重ね焼き痕、底裏に焼台付着、粉殻痕跡、見込みにシッタ疵
61	116	椀 B	4X ライン畦 8-10Y	黒褐色土層	16.3		7.7	5	内面に重ね焼き痕
62	223	椀 B	2-4X8-10Y	黒褐色土層	15.9		7.4	5	内面に重ね焼き痕
63	226	椀 B	6-8X12-14Y	黒褐色土層	16		7.4	5.2	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
64	232	椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	16		7.6	5.7	内面に重ね焼き痕
65	215	椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	16.1		7.3	5.2	内面に重ね焼き痕
66	177	椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	15.9		7.2	5.1	内面に重ね焼き
67	31	椀 B	4-6X8-10Y	黒褐色土層	16.1		7.8	5.6	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
68	173	椀 B	4-6X8-10Y	黒褐色土層	16.4		7.7	5.3	内面に重ね焼き痕
69	27	椀 B	4-6X6-8Y	黒褐色土層	16.3		7.3	5.2	内全面降灰、重ね焼き最上段
70	22	椀 B	4-6X10-12Y	黒褐色土層	16.2		8.7	5.6	内面に重ね焼き痕
71	28	椀 B	2-4X8-10Y	黒褐色土層	16.3		7.8	5.1	内面に重ね焼き痕、割れ口研磨、高台内に乾燥切れ撫で付け痕
72	42	椀 B	2-4X8-10Y	黒褐色土層	16.5		7.8	6.9	内面に重ね焼き痕
73	224	椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	16.3		7.3	5.1	内面に重ね焼き痕、割れ口研磨
74	122	椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	16.5		7.6	6.1	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
75	114	椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	16.6		7.3	5.8	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
76	171	椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	16.2		7.7	5.3	内面に重ね焼き痕
77	214	椀 B	4-6X8-10Y	黒褐色土層	16.3		7.5	5.7	内面に重ね焼き痕
78	218	椀 B	2-4X8-10Y	黒褐色土層	16.1		7.8	5.2	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
79	188	椀 B	pit1	黒褐色土層	16.6		7.1	5.4	内面に重ね焼き痕
80	165	椀 B	4X ライン畦 10-12Y	黒褐色土層	16.5		7.9	5.7	内面に重ね焼き痕
81	169	椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	16.5		7.5	5.4	内面に重ね焼き痕、高台内に乾燥切れ撫で付け痕
82	170	椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	16.6		8	5.9	内面に重ね焼き痕
83	189	椀 B	2-4X10-12Y	黒褐色土層	16.4		7.8	5.3	内面に重ね焼き痕、底裏に焼台付着、粉殻痕跡
84	183	椀 B	2-4X10Y ライン畦	黒褐色土層	16.7		7.7	5.7	内面に重ね焼き痕、割れ口研磨、s底裏に板状圧痕
85	181	椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	16.5		7.8	5.4	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
86	167	椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	16.5		7.6	5.9	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
87	172	椀 B	4-6X12Y ライン畦	黒褐色土層	16.5		7.9	5.5	内面に重ね焼き痕、高台内に乾燥切れ撫で付け痕
88	124	椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	16.8		8	5.9	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
89	110	椀 B	4X ライン畦 12-14Y	黒褐色土層	16.8		7.4	5.8	内面に重ね焼き痕
90	135	椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	16.9		7.6	5.5	内面に重ね焼き痕
91	34	椀 B	4-6X10-12Y	黒褐色土層	16.6		7.3	5.7	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
92	20	椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	16.6		7.6	4.9	内面に重ね焼き痕、高台内に乾燥切れ撫で付け痕
93	2	椀 B	4-6X12Y ライン畦	黒褐色土層	16.8		7.5	5.5	内面に重ね焼き痕
94	113	椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	16.9		7.4	5.3	内面に重ね焼き痕、割れ口研磨
95	105	椀 B	4X ライン畦 12-14Y	黒褐色土層	16.7		7.7	5.8	内面に重ね焼き痕、割れ口研磨、見込みにシッタ疵
96	206	椀 B	4-6X6-8Y	黒褐色土層	16.8		7.2	5.4	内面に重ね焼き痕、割れ口研磨
97	216	椀 B	4-6X10-12Y	黒褐色土層	16.8		7.3	5.2	内面に重ね焼き痕
98	213	椀 B	2-4X12-14Y	黒褐色土層	16.7		7.7	5.3	内面に重ね焼き痕
99	69	椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	15.4		7.4	6.4	内面に重ね焼き痕
100	70	椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	16.2		7.7	5.6	内面に重ね焼き痕、内面口縁直下に沈線、見込みにシッタ疵
101	71	椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	16.5		8.4	5.6	内面に重ね焼き痕、内面口縁直下に沈線、見込みにシッタ疵
102	68	椀 B	2-4X12-14Y	黒褐色土層	16.8		8.2	5.5	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
103	1	輪花椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	16.2		7.9	6	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
104	145	輪花椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	16		7.4	5.5	内面に重ね焼き痕
105	41	輪花椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	16.6		7.8	5.1	内面に重ね焼き痕

図No	実測No	器形	出土グリッド	出土層位	口径	胴径	高台径	器高	備 考
106	147	輪花椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	16		7.8	5.4	内面に重ね焼き痕、畳付に砂粒痕
107	192	輪花椀 B	6-8X12-14Y	黒褐色土層	15.2		7.6	5.2	内面に重ね焼き痕
108	152	輪花椀 B	4-6X12Y ライン畦	黒褐色土層	15.1		7.3	5.6	内面に重ね焼き痕
109	195	輪花椀 B	4-6X6-8Y	黒褐色土層	15.7		7.2	5.6	内面に重ね焼き痕、割れ口研磨、s 見込みにシッタ疵
110	202	輪花椀 B	4X ライン畦 10-12Y	黒褐色土層	16.1		7.7	5.9	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
111	200	輪花椀 B	4-6X12Y ライン畦	黒褐色土層	15.7		7.5	5.4	内面に重ね焼き痕
112	36	輪花椀 B	4-6X10-12Y	黒褐色土層	15.5		7.3	5.2	内面に重ね焼き痕、畳付にすざ圧痕
113	35	輪花椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	15.7		8	5.7	内面に重ね焼き痕
114	139	輪花椀 B	2-4X8-10Y	黒褐色土層	16		7.9	5.2	内面に重ね焼き痕、割れ口研磨
115	6	輪花椀 B	2-4X8-10Y	黒褐色土層	15.9		7.5	5.6	内面に重ね焼き痕
116	33	輪花椀 B	pit1	黒褐色土層	16		7.4	5.6	内面に重ね焼き痕、底裏に板状圧痕
117	108	輪花椀 B	2-4X8-10Y	黒褐色土層	16.8		7.7	5.3	内面に重ね焼き痕、割れ口研磨、底裏に板状圧痕
118	197	輪花椀 B	2-4X8-10Y	黒褐色土層	16.6		7.8	5.5	内面に重ね焼き痕、割れ口研磨、高台内に乾燥切れ撫で付け痕
119	134	輪花椀 B	4X ライン畦 10-12Y	黒褐色土層	17		7.7	5.6	内面に重ね焼き痕
120	49	輪花椀 B	4-6X12-14Y	赤褐色土層	16.7		7.5	5.5	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
121	236	輪花椀 B	2-4X12-14Y	砂利層	16.6		7.5	5.1	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
122	244	輪花椀 B	4X ライン畦 6-8Y	黒褐色土層	16.6		7.9	5.4	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
123	25	輪花椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	16.6		6.9	5.1	内面に重ね焼き痕
124	40	輪花椀 B	4X ライン畦 10-12Y	黒褐色土層	16.7		7.7	5.9	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
125	4	輪花椀 B	2-4X8-10Y	黒褐色土層	16.6		7.5	5.8	内面に重ね焼き痕、割れ口研磨
126	237	輪花椀 B	2-4X12-14Y	黒褐色土層	16.7		7.8	5.5	内面に重ね焼き痕
127	3	輪花椀 B	4X ライン畦 12-14Y	黒褐色土層	16.7		7.7	6	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
128	19	輪花椀 B	4X ライン畦 8-10Y	黒褐色土層	17.1		8.1	5.8	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
129	153	輪花椀 B	4X ライン畦 10-12Y	黒褐色土層	17.1		8.3	6.1	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
130	238	輪花椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	16.1		7.7	5.4	内面に重ね焼き痕
131	23	輪花椀 B	4X ライン畦 12-14Y	黒褐色土層	16.4		7.6	5.7	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
132	21	輪花椀 B	4X ライン畦 12-14Y	黒褐色土層	17.6		7.9	5.8	内面に重ね焼き痕
133	245	輪花椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	16.2		7.8	5.5	内面に重ね焼き痕、割れ口研磨
134	242	輪花椀 B	2-4X12-14Y	黒褐色土層	16.2		7.8	4.4	内面に重ね焼き痕
135	193	輪花椀 B	2-4X10-12Y	黒褐色土層	16.3		7.7	5.5	内面に重ね焼き痕、底裏に板状圧痕
136	15	輪花椀 B	4-6X8-10Y	黒褐色土層	16.2		7.5	5.7	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
137	194	輪花椀 B	6-8X12-14Y	黒褐色土層	15.9		7.3	5.4	内面に重ね焼き痕
138	141	輪花椀 B	4-6X10-12Y	黒褐色土層	16.2		7.5	5.1	内面に重ね焼き痕
139	10	輪花椀 B	4-6X10Y ライン畦	黒褐色土層	16.3		7.6	5.5	内面に重ね焼き痕
140	30	輪花椀 B	2-4X8-10Y	黒褐色土層	16		8.7	5.7	内面に重ね焼き痕、割れ口研磨、高台内に乾燥切れ撫で付け痕
141	146	輪花椀 B	4X ライン畦 6-8Y	黒褐色土層	16.4		7.8	6	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
142	241	輪花椀 B	4X ライン畦 6-8Y	黒褐色土層	16.5		8.1	5.7	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
143	222	輪花椀 B	2-4X12-14Y	黒褐色土層	16.1		7.8	5.4	内面に重ね焼き痕、底裏に板状圧痕
144	44	輪花椀 B	4X ライン畦 6-8Y	黒褐色土層	16.2		7.9	5.5	内面に重ね焼き痕
145	45	輪花椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	16.2		7.7	5.5	内面に重ね焼き痕
146	159	輪花椀 B	4X ライン畦 10-12Y	黒褐色土層	16		7.8	5.6	内面に重ね焼き痕、割れ口研磨、見込みにシッタ疵
147	201	輪花椀 B	4-6X8-10Y	黒褐色土層	15.7		8.3	5	内面に重ね焼き痕
148	158	輪花椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	16		7.2	5.8	内面に重ね焼き痕、底裏に板状圧痕
149	46	輪花椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	15.8		7.2	5.4	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
150	47	輪花椀 B	4-6X8Y ライン畦	黒褐色土層	15.8		7.3	5.7	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
151	225	輪花椀 B	4-6X10-12Y	黒褐色土層	15.8		7.4	5.4	内面に重ね焼き痕
152	196	輪花椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	16.2		7.5	5.8	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵 高台内に乾燥切れ撫で付け痕
153	14	輪花椀 B	2-4X10Y ライン畦	黒褐色土層	16.1		7.5	5.4	内面に重ね焼き痕、底裏に板状圧痕
154	39	輪花椀 B	4X ライン畦 8-10Y	黒褐色土層	16.1		7.6	5.5	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
155	199	輪花椀 B	4X ライン畦 10-12Y	黒褐色土層	16.4		7.8	6	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
156	24	輪花椀 B	4X ライン畦 8-10Y	黒褐色土層	16		7.3	5.5	内面に重ね焼き痕、底裏に板状圧痕、底裏に板状圧痕
157	50	輪花椀 B	4X ライン畦 10-12Y	黒褐色土層	16		7.2	5.9	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
158	231	輪花椀 B	4-6X6-8Y	黒褐色土層	16.2		7.4	5.6	内面に重ね焼き痕
159	107	輪花椀 B	4-6X10-12Y	黒褐色土層	16.3		7.6	5.3	内面に重ね焼き痕、割れ口研磨
160	43	輪花椀 B	2-4X12Y ライン畦	黒褐色土層	16		6.8	5.3	内面に重ね焼き痕
161	32	輪花椀 B	4-6X8-10Y	黒褐色土層	16.1		7.9	5.6	内面に重ね焼き痕、畳付に板状圧痕
162	85	椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層			7.1		内面に重ね焼き痕と「×」ヘラ記号

図No	実測No	器形	出土グリッド	出土層位	口径	胴径	高台径	器高	備考
163	100	椀 B	4-6X8-10Y	黒褐色土層	8.7		4.3	3.2	内全面降灰、重ね焼き最上段
164	8	椀 B	4-6X12Y ライン畦	黒褐色土層	9		4.5	3.1	内面に重ね焼き痕、外側に小碗口縁着
165	161	椀 B	4-6X6-8Y	黒褐色土層	9.3		4.8	2.9	内全面降灰、重ね焼き最上段
166	132	椀 B	4-6X12Y ライン畦	黒褐色土層	9.2		4.6	3.1	内面に重ね焼き痕
167	52	椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	9.2		4.6	3.2	内面に重ね焼き痕
168	140	椀 B	4-6X10-12Y	黒褐色土層	9.1		4.7	3.1	内全面降灰、重ね焼き最上段
169	53	椀 B	4-6X12Y ライン畦	黒褐色土層	9.5		4.6	3.5	内面に重ね焼き痕か、見込みにシッタ疵
170	130	椀 B	4-6X6-8Y	黒褐色土層	10.1		5.5	3.2	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
171	87	椀 B	4X ライン畦 6-8Y	黒褐色土層	10.3		5.3	3	内面に重ね焼き痕
172	246	椀 B	4-6X6-8Y	黒褐色土層	10.7		5.8	3.9	内全面降灰、重ね焼き最上段
173	61	椀 B	4-6X8-10Y	黒褐色土層	10.6		5.2	3.5	内面に重ね焼き痕
174	143	椀 B	2-4X12-14Y	黒褐色土層	11		5.3	3.4	内面に重ね焼き痕
175	56	椀 B		表採	10.9		5.3	3.3	内全面降灰、重ね焼き最上段
176	67	椀 B	4-6X12-14Y	赤褐色土層	11		5.3	3.4	内面に重ね焼き痕
177	235	椀 B	2-4X12-14Y	黒褐色土層	10.9		5.8	3.6	内面に重ね焼き痕
178	55	椀 B	4-6X8-10Y	黒褐色土層	11.2		5.3	4	内面に重ね焼き痕か
179	133	椀 B	2-4X8-10Y	黒褐色土層	11.4		5.6	3.6	内面に重ね焼き痕、割れ口研磨
180	59	椀 B	2-4X8-10Y	黒褐色土層	11.2		5.4	3.7	内全面降灰、重ね焼き最上段、割れ口研磨
181	233	椀 B	4-6X6-8Y	黒褐色土層	11.3		5.8	3.5	内面に重ね焼き痕
182	54	椀 B	2-4X10-12Y	黒褐色土層	11.4		6.1	3.4	内面に重ね焼き痕
183	149	椀 B	2-4X8-10Y	黒褐色土層	11.4			3.6	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
184	89	片口椀	4-6X10-12Y	黒褐色土層	12.2		6.3	3.6	内全面降灰、重ね焼き最上段
185	60	輪花椀 B	2-4X12-14Y	黒褐色土層	10.2		4.7	3.6	内全面降灰、重ね焼き最上段
186	162	輪花椀 B	4X ライン畦 12-14Y	黒褐色土層	10.6		5	3.6	内面に重ね焼き痕
187	57	輪花椀 B	2-4X8-10Y	黒褐色土層	10.7		5.3	3.7	内全面降灰、重ね焼き最上段、割れ口研磨
188	66	輪花椀 B	4-6X10-12Y	黒褐色土層	10.7		5.5	3.8	内面に重ね焼き痕
189	65	輪花椀 B	2-4X10Y ライン畦	黒褐色土層	11		5.4	3.7	内全面降灰、重ね焼き最上段
190	157	輪花椀 B	2-4X12-14Y	黒褐色土層	11.2		5.8	3.2	内面に重ね焼き痕、割れ口研磨
191	155	輪花椀 B	4-6X8-10Y	黒褐色土層	11.2		5.2	4.1	内面に重ね焼き痕
192	63	輪花椀 B	4-6X12-14Y	赤褐色土層	11.3		5.5	3.5	内面に重ね焼き痕
193	163	輪花椀 B	6-8X12-14Y	黒褐色土層	11.3		5.2	3.9	内面に重ね焼き痕
194	240	輪花椀 B	4-6X12-14Y	黒褐色土層	11.5		5.5	3.8	内全面降灰、重ね焼き最上段
195	62	輪花椀 B	2-4X12-14Y	黒褐色土層	11.3		6	3.8	内面に重ね焼き痕
196	58	輪花椀 B	2-4X12-14Y	黒褐色土層	11.4		5.5	3.3	内面に重ね焼き痕
197	80	玉縁椀	4-6X10-12Y	黒褐色土層	17		7.5	5.9	内面に重ね焼き痕、高台内に右回転割り
198	72	玉縁椀	4-6X12-14Y	黒褐色土層	16.6		7.6	6.3	内面に重ね焼き痕、割れ口研磨
199	73	玉縁椀	4-6X12-14Y	黒褐色土層	10.7		5	3.8	内全面降灰、重ね焼き最上段
200	154	玉縁椀	4-6X6-8Y	黒褐色土層	11.1		5	3.7	内全面降灰、重ね焼き最上段
201	148	玉縁椀	4-6X12-14Y	黒褐色土層	9.8		4.9	3.4	内面に重ね焼き痕
202	151	玉縁椀	2-4X10-12Y	黒褐色土層	10.7		5.5	3.8	内面に重ね焼き痕、割れ口研磨
203	79	玉縁椀	4-6X12-14Y	黒褐色土層	10.6		5.3	3.8	内面に重ね焼き痕
204	75	玉縁椀	4X ライン畦 12-14Y	黒褐色土層	10.5		5.3	3.5	内面に重ね焼き痕か
205	76	玉縁椀	2-4X8-10Y	黒褐色土層	11.1		5.3	4.8	内面に重ね焼き痕
206	74	玉縁椀	2-4X8-10Y	黒褐色土層	10.9		4.8	3.8	内面に重ね焼き痕
207	77	玉縁椀	2-4X12Y ライン畦	黒褐色土層	11.2		5	3.8	内全面降灰、重ね焼き最上段
208	78	玉縁椀	2-4X12Y ライン畦	黒褐色土層	11.5		5	4.9	内面に重ね焼き痕
209	64	深椀	2-4X10-12Y	黒褐色土層	7.8		4.1	3.9	内面に重ね焼き痕
210	51	深椀		黒褐色土層	8		4.1	2.9	内全面降灰、重ね焼き最上段
211	93	耳皿	4-6X6-8Y	黒褐色土層			4.4		人工施釉の可能性あり
212	90	段皿		黒褐色土層	7.6		3.8	2.2	内全面降灰、重ね焼き最上段
213	112	稜皿	4X ライン畦 12-14Y	黒褐色土層	9.8		5.3	3	内面に重ね焼き痕
214	82	稜皿	2-4X12-14Y	黒褐色土層	10.1		5.4	2.6	内面に重ね焼き痕
215	111	稜皿	2-4X8-10Y	黒褐色土層	10.1		5.5	2.6	内面に重ね焼き痕
216	144	稜皿	4-6X6-8Y	黒褐色土層	10		5.8	2.7	内面に重ね焼き痕
217	142	稜皿	4X ライン畦 12-14Y	黒褐色土層	10.3		5.2	2.7	内面に重ね焼き痕
218	156	稜皿	2-4X8-10Y	黒褐色土層	10.4		5.3	2.7	内面に重ね焼き痕
219	131	稜皿	2-4X10-12Y	黒褐色土層	10.5		5.2	2.4	内面に重ね焼き痕
220	86	稜皿	4-6X12-14Y	黒褐色土層	10.4		5.6	2.7	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵、高台内に乾燥切れ撫で付け痕
221	150	稜皿	4X ライン畦 12-14Y	黒褐色土層	10.5		5.7	2.8	内面に重ね焼き痕、割れ口研磨
222	81	稜皿	4-6X12-14Y	黒褐色土層	10.7		5.6	2.7	内面に重ね焼き痕、割れ口研磨、底裏に板状圧痕

図No.	実測No.	器形	出土グリッド	出土層位	口径	胴径	高台径	器高	備考
223	160	稜皿	2-4X12Y ライン畦	黒褐色土層	10.6		5.7	2.7	内面に重ね焼き痕
224	128	稜皿	4X ライン畦 12-14Y	黒褐色土層	10.6		5	2.9	内面に重ね焼き痕、見込みにシッタ疵
225	129	稜皿	4-6X12-14Y	赤褐色土層	10.8		5.5	2.8	内全面降灰、重ね焼き最上段
226	88	稜皿	2-4X10Y ライン畦	黒褐色土層	10.8		5.3	2.9	内全面降灰、重ね焼き最上段
227	250	広口瓶	2-4X10-12Y	黒褐色土層	20.6	19.8			人工施釉の可能性高い
228	249	広口瓶	2-4X12Y ライン畦	黒褐色土層		20.2	12.7		
229	84	広口瓶	2-4X10-12Y ,2-4X10Y ライン畦 ,4-6X10-12Y	黒褐色土層	20				降灰著しい
230	243	広口瓶	4-6X12-14Y	黒褐色土層					
231	248	広口瓶		表採			11.2		底裏乾燥切れに布圧痕、焼台転用
232	229	広口瓶	4-6X6-8Y	黒褐色土層	20.5				
233	92	広口瓶	4-6X4-6Y	砂利層					降灰著しい、胴部に刻文
234	91	広口瓶	2-4X10-12Y	黒褐色土層			13.2		降灰著しい、焼台に転用、高台内に焼台礫痕
235	228	壺	4-6X6-8Y	黒褐色土層	14.8				
236	94	壺	2-4X8-10Y ,2-4X12-14Y,2-4X12Y ライン畦 ,4-6X6-8Y	黒褐色土層・赤褐色土層		30.7			降灰著しい、235 と同一個体か
237	96	甕	2-4X8-10Y ,4-6X4-6Y	黒褐色土層	29.4				降灰著しい、胴部外面に並行タタキ痕、238 と同一個体か
238	95	甕	2-4X10-12Y ,2-4X12Y ライン畦 ,4-6X12-14Y	黒褐色土層		42.1			人工施釉の可能性高い、胴部外面に並行タタキ痕
239	99	甕	4-6X6-8Y	黒褐色土層	31.2				人工施釉の可能性高い
240	227	甕		混礫淡赤土層					頸部付け根に凸帯
241	101	蓋		黒褐色土層	6.7				内全面降灰、重ね焼き最上段（逆位）
242	97	鉢	4-6X14-16Y	黒褐色土層					
243	98	鉢	4-6X10-12Y	黒褐色土層					
244	102	提瓶か	4-6X4-6Y	黄褐色土層					須恵器
245	103	提瓶	4-6X12-14Y	黒褐色土層					須恵器、外面にカキ目
246	104	提瓶	表採	混礫淡赤土層					須恵器、外面に二重沈線



## V 考 察

H-114号窯は、「野依記念学術交流館」の建設工事に際して、初めてその存在が知られた遺跡（窯跡）であり、発見時には既に窯体の大半が失われていたため、調査はほぼ灰原に限られることとなった。しかし、遺跡が厚い流土の下に埋もれていて、その存在を地表からは全く窺いえない状況にあったことを考えれば、発掘調査を実施して部分的にでも記録保存の処置を講ずることができたことは、むしろ幸いであったと言うべきだろう。

本窯の所属する東山地区は、猿投窯の中でも早くから宅地開発の波が押し寄せてきた地域であり、多数の窯跡が調査されないままに消滅してしまった。このため、窯跡の数自体は少なくないにも拘わらず、東山地区における本格的な発掘調査の事例は決して多いとは言えない。しかし、前述のように東山地区には他地区に希薄な時期の窯跡が集中する傾向があり、この地区の窯跡とその生産内容の実体を明らかにすることは、猿投窯全体に対する理解を深める上で極めて重要な課題である。今回の調査は、この課題の解決へ向けての新たな検討素材を提供するものと位置付けることができ、その意義は決して小さくないと思われる。

以下、出土遺物からみた本窯の操業時期（編年的位置）と関連する若干の問題に論及して、今後の猿投窯研究の一助としたい。

### (1) H-114号窯の相対編年上の位置

H-114号窯の出土遺物を特徴づけているのは、なんと言っても圧倒的多数を占めている椀Bである。椀Bは、9世紀に猿投窯で灰釉陶器生産が始まって以来、徐々に形態変化（型式変遷）を遂げながら作り続けられる椀（椀A）とは異なって、10世紀に新たに出現し、中世の「山茶碗」へと（型的に）繋がってゆくとされる器形（器種）である（藤澤1982、檜崎1984、前川1984、斎藤1989）。これまでの研究によると、猿投窯における椀Bの生産はH-72号窯式から始まり、百代寺窯式以降盛行するとされており、H-114号窯出土遺物のあり方は明らかに百代寺窯式に近い様相と評価できる。しかし、それぞれの標式窯であるH-72号窯（10世紀半ば過ぎ）と百代寺窯（11世紀後半）の間には、時間的に大きな隔りがあり（尾野1999）、そのいずれとの類似性が高いだけでH-114号窯の操業時期を論ずることには大きな限界がある。

既に指摘したことがあるように、こうした猿投窯の編年上の不連続は、その背景に猿投窯系の陶工の美濃側（東濃窯）への移動と尾張側（猿投窯・瀬戸窯）への還流があると考えられるので（尾野1999・2003）、こと古代の窯業生産に関する限り、猿投窯と東濃窯を一体的な編年体系の中で捉えることには、十分な妥当性があると判断される。そこで、以下では東濃窯の事例も参照しつつ、検討を進めることとしたいが、ここで注意しておく必要があるのは、猿投窯と東濃窯の併行関係である。

東濃窯に関する編年研究が本格的に始められた当初、灰釉陶器生産の最末期としては丸石2号窯式、「山茶碗」生産の最初期としては西坂1号窯式が設定されていた（田口1973・1983）。しか

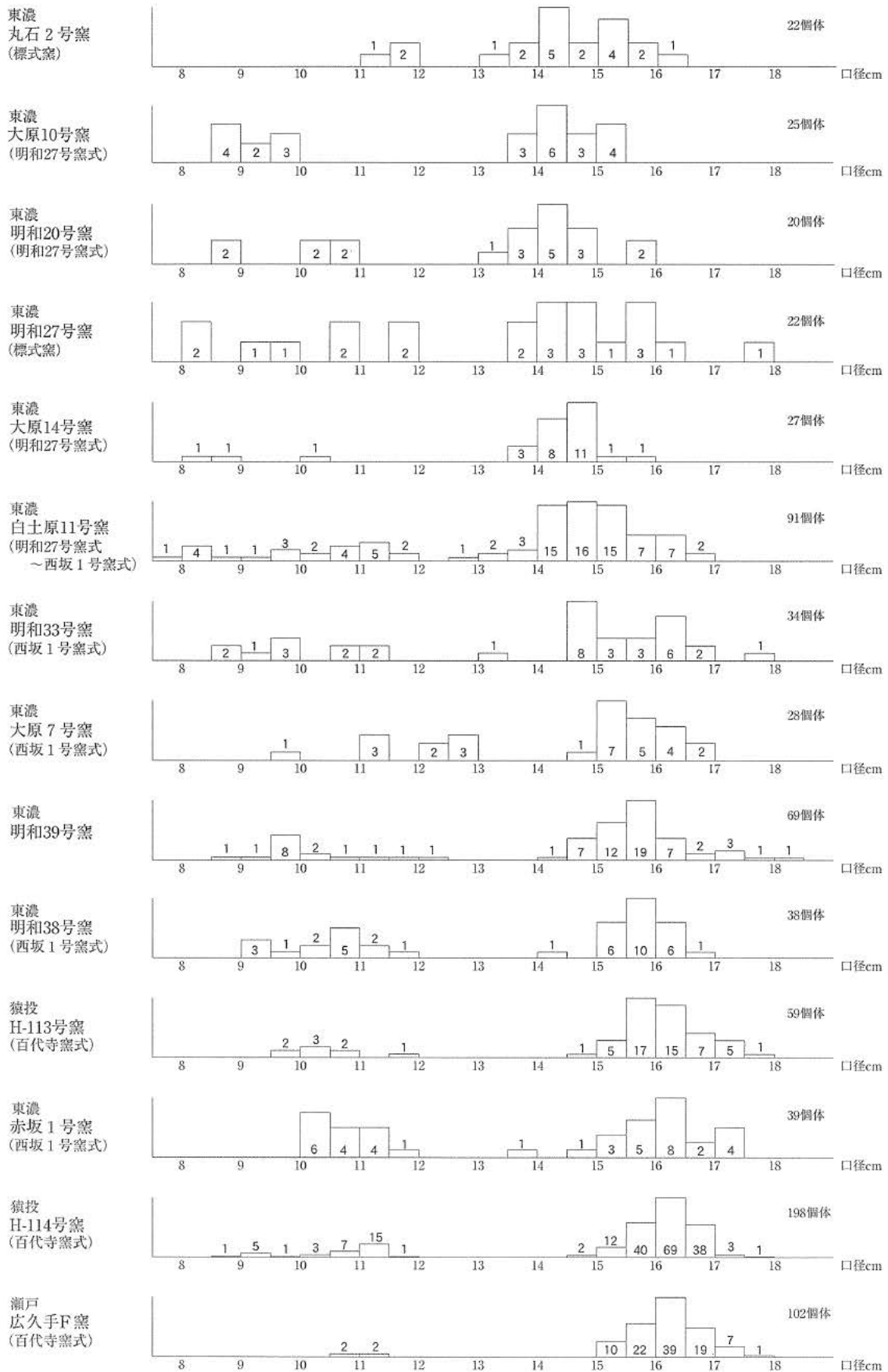
し、宅地開発に伴う大原古窯跡群や明和古窯跡群などの大規模発掘調査が進められる中で、両窯式の中間的様相を呈する大原10号窯や明和27号窯の存在が注目されるようになり、新たに明和27号窯式が追加設定されたのである（若尾1987・1990）。当初、明和27号窯式は「山茶碗」に相当する「白瓷系陶器」の最初期段階と認識されていた。しかし、猿投窯における灰釉陶器生産最末期の百代寺窯式併行とする見解が流布していく中で、次第に明和27号窯式は灰釉陶器（「白瓷」）生産の終末期と位置付けられるようになり、後続の西坂1号窯式が猿投窯における「山茶碗」の最初期段階（第Ⅶ期第1型式）に併行すると目されるようになったのである（斎藤1989・1994）。

これに対して、「山茶碗」の編年研究を精力的に推し進めた藤澤良祐氏は、西坂1号窯式における器種構成や人工施釉の存在が、依然として末期の灰釉陶器生産の様相と共通していることを重視し、同窯式を猿投窯百代寺窯式併行と捉えるべきだとした（藤澤1990）。さらに、最新の東濃窯に関する編年研究では、西坂1号窯式が百代寺窯式の後半に併行すると考える見解も示されるなど（山内2004）、灰釉陶器生産末期の猿投窯と東濃窯の併行関係については、論者によって多様な見解が示されているのが現状である。

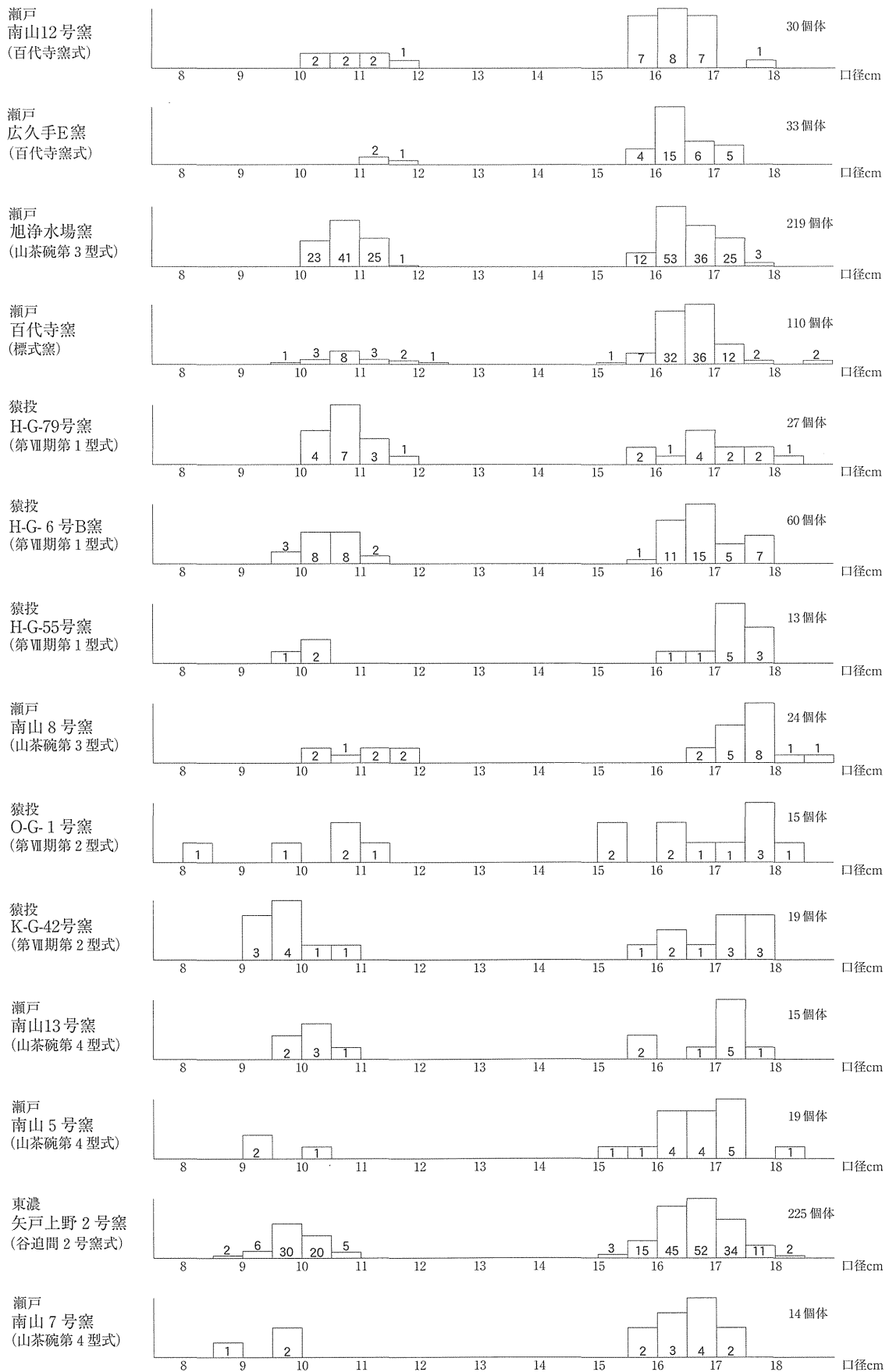
そこで、まず丸石2号窯式から初期の「山茶碗」にかけての編年を整理すべく、いずれの段階の窯からも出土している椀Bについて検討を加えてみることにしよう。第16・17図は、各窯ごとに椀Bの口径分布をヒストグラムにして示したものである<sup>(註2)</sup>。この図から、最も標準的な大きさ（口径14～17cm）の椀Bの口径が、丸石2号窯式以降徐々に大型化し、非人工施釉の「山茶碗」生産に切り替わると、一転して小型化する傾向のあることが読み取れよう。これは、明和27号窯式から西坂1号窯式にかけて椀Bの口径が大型化するという山内伸浩氏の指摘（山内2005）を裏付けるものであるが、注目すべきは、西坂1号窯式に位置付けられている諸窯と百代寺窯式に位置付けられている諸窯の間に認められる様相差である。

すなわち、西坂1号窯式に位置付けられている諸窯は、赤坂1号窯を唯一の例外として、いずれも百代寺窯式に位置付けられている諸窯よりも古相を呈しており、最も新しい様相の赤坂1号窯ですら、百代寺窯式の諸窯の中では最古相のH-113号窯などとの近似性が指摘できるに過ぎない。つまり、明和27号窯式はもちろんのこと、百代寺窯式は西坂1号窯式とも純然たる併行関係にはなく、敢えて言うならば西坂1号窯式の後半が百代寺窯式の前半と併行する、ということになる。

また、無釉化した「山茶碗」の最古段階とされる瀬戸窯山茶碗第3型式と百代寺窯式（瀬戸窯山茶碗第2型式）の関係についても注意が必要である。なぜなら、瀬戸窯山茶碗第3型式の代表的窯跡として知られる旭浄水場窯の椀Bは、口径分布（第17図）を見る限りでは百代寺窯と大差なく、僅かではあるが古相を呈しているようにすら捉えられないではないからである。このため、瀬戸窯山茶碗第2型式の百代寺窯を瀬戸窯山茶碗第3型式に先行すると断定することには、いささか躊躇せざるをえない面がある。もっとも、人工施釉が行われていない旭浄水場窯のほうが、明確な人工施釉陶器を生産している百代寺窯よりも、無釉化という点では後出的である。しかし、複数存在したであろう工人集団の全てが一斉に人工施釉を放棄したとは限らない以上、人工施釉



第16図 灰釉陶器から「山茶碗」移行期の椀B口径分布変遷図(1)



第17図 灰釉陶器から「山茶碗」移行期の椀B口径分布変遷図（2）

の有無を以て一概に時期的先後関係と見なすことには慎重であるべきではなからうか。

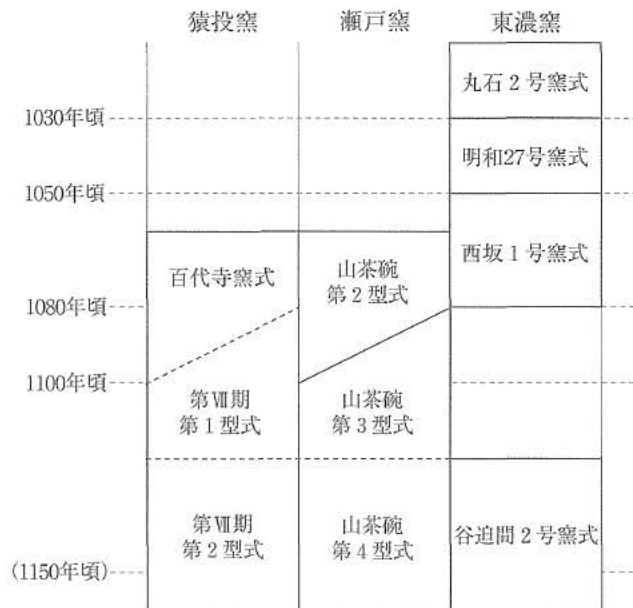
もちろん、口径分布のあり方についても、工人集団間に差異はあったかもしれないから、そのみを根拠として旭浄水場窯を百代寺窯に先行するものと決めつけることも、一面的評価に過ぎるとの謗りを免れないだろう。ただ、百代寺窯からの「百代寺」刻銘陶片の大量出土が象徴的に示しているように、同窯で多量の特注品生産が行われていたらしいことには、充分な注意が必要である。と言うのも、こうした窯の特殊性は、同時期の他の窯が無施釉の

「山茶碗」生産へ移行していたとしても、依然として人工施釉を行っていたことの合理的解釈を可能とするからである。したがって、ここでは最終的な結論を出すには至らないが、現時点では百代寺窯式（瀬戸窯山茶碗第2型式）と瀬戸窯山茶碗第3型式について、生産相でも一定の共時性を有していた蓋然性を考慮し、猿投窯・瀬戸窯・東濃窯の併行関係を第18図のように考えておきたい。<sup>(註3)</sup>

では、以上の認識を踏まえた上で、H-114号窯は編年的にどう位置付けられるだろうか。H-114号窯から出土した碗Bの口径分布を見ると、西坂1号窯式の赤坂1号窯や、百代寺窯式の広久手E・F窯と近親性が高いことが判る（第17図）。したがって、西坂1号窯式・百代寺窯式のいずれに比定してもよさそうであるが、H-114号窯が猿投窯に属する窯跡であることを考慮するならば、西坂1号窯式の後半と併行関係にある百代寺窯式(註4)の古相と位置付けることが妥当ではないかと思われる。

## (2) H-114号窯の操業時期（暦年代観）

さて、H-114号窯の相対編年上の位置については、上記のように考えられたわけだが、それは暦年代的にはいつ頃のことと考えられようか。残念ながら、これまで東海地方の古代灰釉陶器窯からは、紀年銘資料の出土が全く知られていないため、窯跡出土遺物だけを手がかりに操業時期（暦年代）を推定することは極めて難しい。また、窯跡に限らず、一般に地方の古代遺跡については、その創建・存続・廃絶時期あるいは操業期間の暦年代を考える手がかりとなる文献史料が極めて乏しい。しかし、東海地方産の「灰釉陶器」は、延暦十三年（794）の遷都以降1000年以上の永きにわたって日本の首都であった京都へもかなりの量が搬入されていたらしく、平安京



第18図 猿投窯・瀬戸窯・東濃窯併行関係模式図

跡の発掘調査でも土師器皿に伴って出土することが珍しくない。そして、平安京跡およびその近郊から出土する土師器皿については、文献史料との対比から出土遺構の暦年代が推定できる事例が少なからずある。そこで、次に平安京跡とその近郊から出土した資料を対象として、どの段階の「灰釉陶器」がいつ頃の土師器皿に共伴しているのかを見ていくこととしよう。

平安京跡およびその近郊からは、「灰釉陶器」生産開始以降さまざまな時期の「灰釉陶器」や「山茶碗」が出土しているが、ここでは丸石2号窯式から初期「山茶碗」（瀬戸窯山茶碗第3型式相当）までを対象とする。必ずしも網羅的に集めたわけではないため、遺漏も多いかと思われるが、土師器皿との良好な共伴例としては、以下の事例が挙げられよう（第19・20図）。

- a. 平安京左京二条三坊九町 S E 273 中層（平尾1994a）
- b. 平安京左京四条三坊十三町 S E 531（横田ほか1984）
- c. 平安京左京一条三坊十二町（烏丸線No.42）土壙48（大矢ほか1981）
- d. 平安京左京北辺三坊六町 S D 41 A（平良ほか1980）
- e. 平安京左京三条三坊十三町（烏丸線No.65）落込2 上層（大矢ほか1982）
- f. 平安京左京五条三坊十六町 S E 1230（吉川1998）
- g. 平安京左京四条一坊六町 S E 8 掘り方（吉川ほか1975）

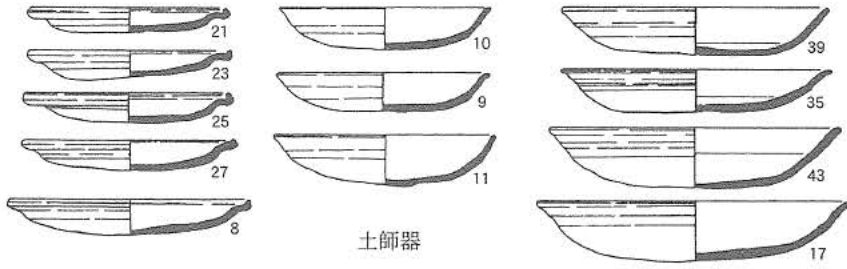
以下、各事例を検討する。

事例 a 平安京左京二条三坊九町 S E 273 中層出土の「灰釉陶器」は、皿の口径がやや大きめであることを除くと、いずれも明和4・9・17・21号窯など丸石2号窯式に位置付けられている窯からの出土品に類品を見いだすことができる。共伴の土師器皿の様相は、平安京左京二条二坊九町高陽院跡 S G 1 - A 出土品（第19図）と極めて近く、S G 1 - A は治安元年（1021）に藤原頼通が造営した高陽院の池の埋土最下層にあたる。この層は、長暦三年（1039）の火災に伴うと考えられる焼土層に覆われており、出土遺物には1021～1039年の暦年代が与えられるので、S E 273 中層出土遺物については1020～1040年頃のものと考えられる。したがって、生産から廃棄までの期間を10年ほど考慮するとしても、丸石2号窯式の暦年代の一端が1020～1030年頃にある蓋然性は、かなり高いと思われる。

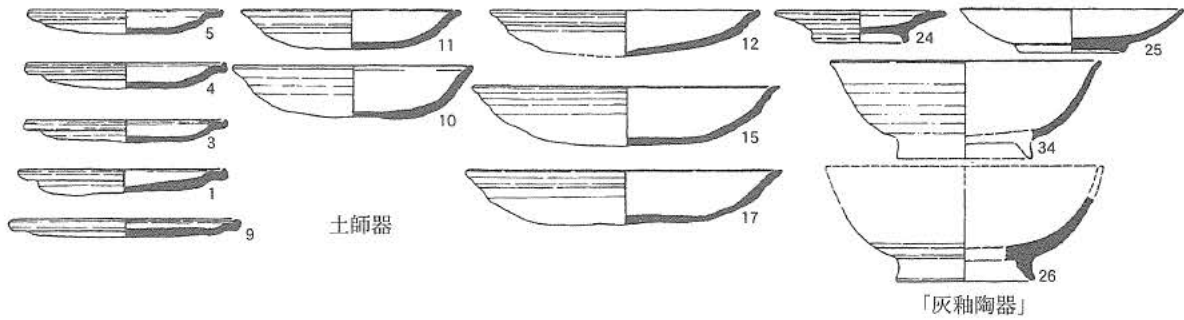
事例 b 平安京左京四条三坊十三町 S E 531 出土の「灰釉陶器」は、やや小片化しているきらいがあるが、全体に明和27号窯出土品との共通性が高い。伴出の土師器皿は、平安京左京二条二坊九町高陽院跡 S G 1 - A 出土品（第19図）に類似するが、いくぶん後出的要素も認められるので、1030～1050年頃のものと考えられよう。

事例 c 平安京左京一条三坊十二町（烏丸線No.42）土壙48 出土の「灰釉陶器」は、明和27号窯式に位置付けられる大原10号窯の出土品との類似性が高い。共伴の土師器皿は、平安京左京四条三坊十三町 S E 531 出土品（事例 b）に近似しているが、僅かに新しい要素を含むようにも見受けられるので、ここでは1040～1060年頃のものとして推定しておく。

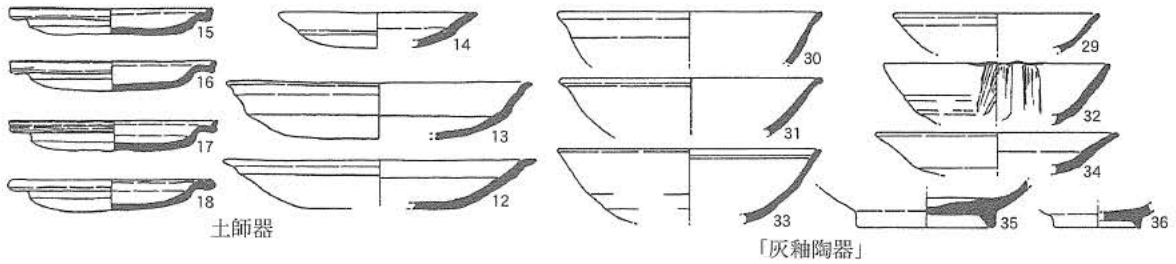
平安京左京二条二坊九町高陽院 SG 1-A (1021~1039年) (平尾1994aより)



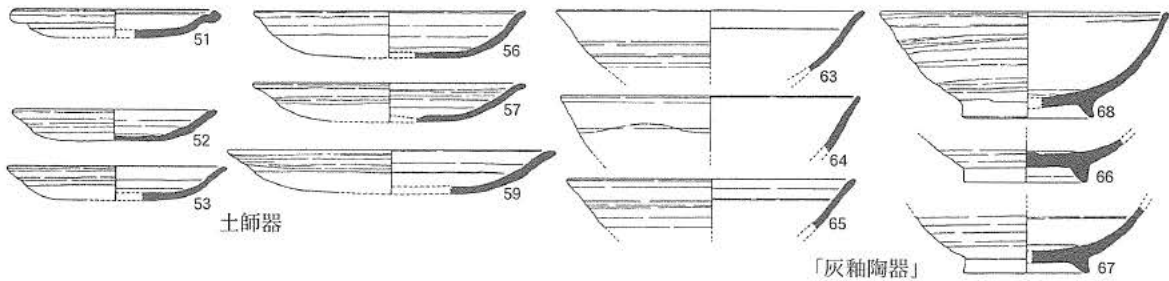
平安京左京二条三坊九町 SE273中層 (平尾1994bより)



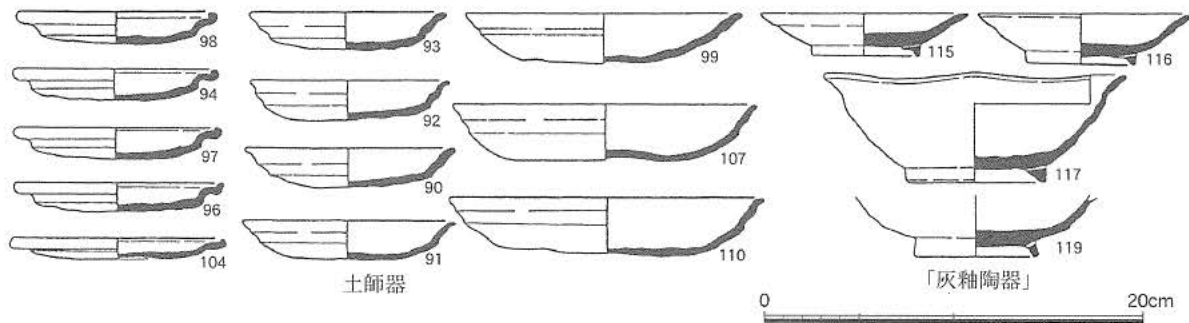
平安京左京四条三坊十三町 SE531 (横田ほか1984より)



平安京左京一条三坊十二町 (烏丸線No.42) 土壙48 (大矢ほか1981より)

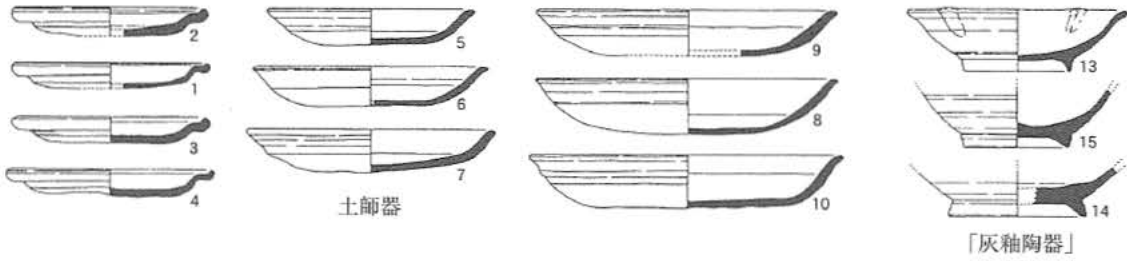


平安京左京北边三坊六町 SD41A (平良ほか1980より)

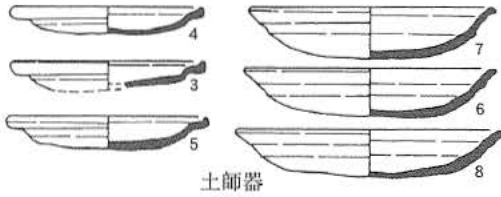


第19図 曆年代推定資料実測図(1)

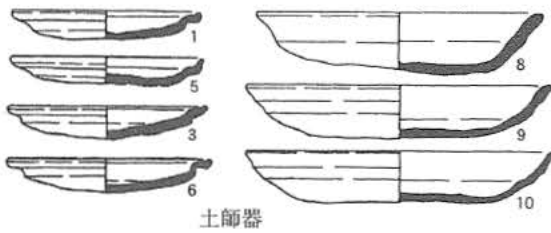
平安京左京三条三坊十三町 (烏丸線No.65) 落込2上層 (大矢ほか1982より)



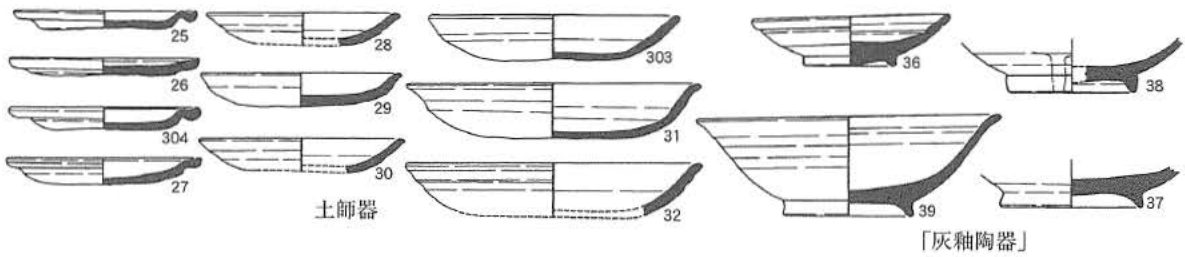
平安宮内裏 遺構76 (承明門地鎮遺構 1071年) (梅川1986より)



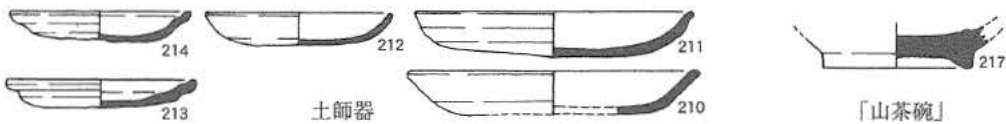
鳥羽離宮跡第95次 庭園地業 (1086~1088年) (吉崎・鈴木1985より)



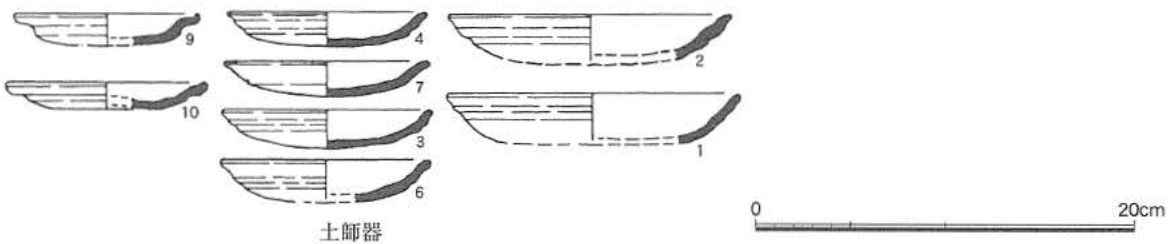
平安京左京五条三坊十六町 SE1230 (吉川1998より)



平安京左京四条一坊六町 SE 8 掘り方 (吉川ほか1975より)



六勝寺B地区 SX105 (尊勝寺九体阿弥陀堂基壇中 ~1107年) (上村1981より)



第20図 暦年代推定資料実測図 (2)



事例 d 平安京左京北辺三坊六町 S D 41 A 出土の「灰釉陶器」は、明和33号窯や大原7号窯・赤坂1号窯など西坂1号窯式とされる窯跡からの出土品に類品を多く見いだすことができる。共伴の土師器皿は、平安京左京一条三坊十二町土壙48出土例（事例 c）との類似性が低くないが、やや後出的な印象を受ける。しかし、延久三年（1071）のものと考えられている平安宮承明門地鎮遺構（遺構76）から、輪宝に伴って出土した土師器皿（第20図）よりは明らかに古相を呈しているので、ここでは1050～1070年頃のものとして推定しておく。

事例 e 平安京左京三条三坊十三町（烏丸線No.65）落込2上層出土の「灰釉陶器」は、西坂1号窯式に位置付けられている大原7号窯出土品との類似性が高い。伴出の土師器皿は、平安宮承明門地鎮遺構（遺構76）出土品（第20図）とほぼ同時期のものと見られるので、1070年を前後する時期のものであろう。

事例 f 平安京左京五条三坊十六町 S E 1230 出土の「灰釉陶器」は、百代寺窯出土品や西坂1号窯式の赤坂1号窯出土品に近似しており、胎土から見て尾張側の窯（猿投窯・瀬戸窯・尾北窯）の製品ではないかと思われるものを含む。共伴の土師器皿は、鳥羽離宮跡第95次庭園地業内出土品（第20図）との類似性が高く、近接した時期的のものと考えられるが、僅かに新しい要素も看取される。鳥羽離宮跡第95次調査地点は、応徳三年（1086）に造営が始められたという鳥羽殿の北殿にあたり、北殿は『後二条師通記』の記載から寛治二年（1088）には庭園を含めて完成していたと考えられている。したがって、S E 1230 出土品については、1080～1100年頃のものとして推定されよう。

事例 g 平安京左京四条一坊六町 S E 8 は、「寛治五年」（1091）の墨書銘を有する須恵器鉢が出土したことで学史上著名な井戸で、ここから出土した「山茶碗」は、初期「山茶碗」（瀬戸窯山茶碗第3型式・猿投窯第Ⅶ期第1型式）の暦年代推定根拠として頻繁に引用されているものである。しかし、「寛治五年」墨書銘須恵器鉢と「山茶碗」は、しばしば誤解されているように共伴して出土したのではない。墨書銘須恵器鉢が木柁の中からの出土であるのに対して、「山茶碗」は掘り方からの出土である。このため、墨書の時期、生産から廃棄までの時間差、掘り方出土遺物と木柁内出土遺物の時期差をどう考えるかという問題があり、墨書銘須恵器鉢は必ずしも1091年以前に初期「山茶碗」の生産が始まっていたことを裏付けているわけではない。もっとも、「山茶碗」に共伴して出土した土師器皿は、鳥羽離宮跡第95次庭園地業内出土品より明らかに新相を呈する一方で、長治二年（1107）に落成した尊勝寺の九体阿弥陀堂の基壇と推定されている遺構（六勝寺跡 B 区 S X 105）の中からの出土品とは高い類似性を示しているから、初期「山茶碗」の生産開始を12世紀最初頭以前と考えることに問題はないだろう。

以上、7つの事例について検討してきたが、消費地遺跡からの出土品という性格上、いずれの暦年代観も生産年代ではなく廃棄年代でしかない。それゆえに、事例 a の項目でも指摘したように、窯の操業年代との間には若干の時間差を考慮する必要があるが、上記検討結果をまとめると、明和27号窯式を1030～1050年頃、西坂1号窯式を1050～1080年頃、百代寺窯式（瀬戸窯山茶碗第2型式）を1060～1100年頃、瀬戸窯山茶碗第3型式（猿投窯第Ⅶ期第1型式）の始まりを1080～

1100年頃と考えることができるのではなからうか。したがって、百代寺窯式の古相に位置付けられるH-114号窯の操業時期については、1060～1080年頃という1070年を前後する暦年代が推定されるのである。(尾野)

(註1)

標式窯であるH-72号窯自体からは、本稿の椀Bに相当する器形(器種)の出土が報告されているわけではないが、量的に乏しいH-72号窯出土品を補うものとして、同窯式の事実上の標式窯と見なされている広久手C3号窯の出土品の中に、椀Bが見いだされている(藤澤1982、松澤・河合1994)。なお、本稿で椀Bと呼称している器形は、東濃窯側の研究では椀C(碗C)と呼ばれているものに相当するが(若尾1987・山内ほか1997)、H-114号窯は猿投窯に属する窯であることから、ここでは猿投窯側の研究(斎藤1989)の用例に準拠した。

(註2)

本来、口径の計測は実物資料に即して行なうことが望ましいが、ここでは便宜的に各窯の発掘調査報告書などに掲載されている実測図に依拠した。

(註3)

第18図のように考えた場合、以前より認識されていた東濃窯における初期「山茶碗」(瀬戸窯山茶碗第3型式併行)窯の不在という空白期間は、解消されるどころか拡大することになる。東濃窯の「山茶碗」に関する最新の研究(山内2004)では、これまで谷迫間2号窯式(瀬戸窯山茶碗第4型式)と評価されてきた窯の中から、古相を示す矢戸上野2号窯を分離して、瀬戸窯山茶碗第3型式の後半併行と位置付け、この空白期間を埋める試みもなされているが、矢戸上野2号窯出土の椀Bの口径分布を見る限り、同窯はやはり瀬戸窯山茶碗第4型式併行ではないかと思われる(第17図)。したがって、東濃窯における初期「山茶碗」段階の空白期間は依然として残ることになるが、これは尾張側(猿投窯・瀬戸窯)に丸石2号窯式から西坂1号窯式前半に対応する窯がないことと同様に、前代において東濃窯で活動していた工人集団のほとんどが、旧国の国境を越えて尾張側へ移動して生産に従事していたことを示すものと捉えてよいのではなからうか。筆者が、こと古代に関する限り、猿投窯・瀬戸窯・東濃窯を一体的に捉えて編年しようと考える理由はここにある。

(註4)

そもそも百代寺窯式は、百代寺窯を標式遺跡として設定された段階名称であるから、実際には百代寺窯よりも古相の窯跡を、「百代寺窯式の前半に位置付ける」という表現形式には、いささか不都合がないではない。しばしば段階様相の実体と標式遺跡出土遺物の実体の間にズレや乖離が認められることが、こうした標式遺跡名による段階呼称方式の問題点であるが、これは発掘調査報告としての本書の課題を大きく逸脱する問題であるから、ここでは問題の所在を指摘するにとどめておく。なお、百代寺窯式(瀬戸窯山茶碗第2型式)に位置付けられている多くの窯(広久手E・F窯、南山12号窯、百代寺窯など)で、椀Bに灰釉の漬け掛けが確認されているのに対して、H-114号窯の椀Bに明確な人工施釉痕跡が全く認められないことは、同窯を百代寺窯式の前半に位置付けることに否定的と言えなくもない。しかし既に述べたように、複数の工人集団が同時に人工施釉を放棄したとは限らないのであるから、ここでは人工施釉の放棄が比較的早くから進んだ窯としてH-114号窯を理解しておきたい。

## 【参考文献一覧】

- 青木 修 1996 「旭浄水場窯跡－初期山茶碗窯成立期の様相－」『(財) 瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第4輯 瀬戸市埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 1987 「灰釉系陶器」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第2集 土田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
- 伊藤厚史 2001 「H-113号窯立会調査」『埋蔵文化財調査報告書』36 (名古屋市文化財調査報告49) 名古屋市教育委員会
- 上村和直 1981 「六勝寺跡A・B調査区」『六勝寺跡発掘調査概報 昭和55年度』京都市埋蔵文化財調査センター
- 宇野隆夫ほか 1978 「昭和52年度京都大学構内遺跡調査の概要」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和52年度 京都大学埋蔵文化財センター
- 梅川光隆 1986 「平安宮内裏」『平安京跡発掘調査概報 昭和60年度』京都市文化観光局
- 大矢義明ほか 1981 『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』Ⅱ 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会
- 大矢義明ほか 1982 『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』Ⅲ 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会
- 小森俊寛・上村憲章 1996 「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 京都市埋蔵文化財研究所
- 尾野善裕 1999 「東濃窯灰釉陶器編年小考」『岐阜史学』第九十六号 岐阜史学会
- 尾野善裕 2003 「古代の尾張・美濃における緑釉陶器生産」『古代の土器研究会 第7回シンポジウム 古代の土器研究－平安時代の緑釉陶器・生産地の様相を中心に－』古代の土器研究会
- 斎藤孝正 1983 『正家1号窯発掘調査報告書』恵那市教育委員会
- 斎藤孝正 1988 「中世猿投窯の研究－編年に関する一考察－」『名古屋大学文学部研究論集』C (史学34) 名古屋大学文学部
- 斎藤孝正 1989 「灰釉陶器生産の一樣相」『美濃の古陶 美濃古窯研究会会報』第3号 美濃古窯研究会
- 斎藤孝正 1994 「東海地方の施釉陶器生産－猿投窯を中心に－」『古代の土器研究会 第3回シンポジウム 古代の土器研究－律令的土器様式の西東3－』古代の土器研究会
- 平良泰久ほか 1980 「平安京跡(左京内膳町) 昭和54年度発掘調査概要」『埋蔵文化財調査概報(1980-3)』京都府教育委員会
- 田口昭二 1973 『美濃焼の起源を探る－美濃古窯の灰釉陶器と山茶碗の編年－』(精華小学校社会科考古シリーズ)4) 岐阜県多治見市精華小学校
- 田口昭二 1983 『考古学ライブラリー17 美濃焼』ニューサイエンス社
- 田口昭二ほか 1986 『大原古窯跡群発掘調査報告書』多治見市教育委員会
- 田口昭二ほか 1985 『赤坂1号窯発掘調査報告書』多治見市教育委員会
- 田口昭二ほか 1990 『明和古窯跡群発掘調査報告書』多治見市教育委員会
- 田口昭二・若尾正成 1994 『明和39号窯発掘調査報告書』多治見市教育委員会
- 田口昭二・山内伸浩 1994 『白土原11・12・13号窯発掘調査報告書』多治見市教育委員会

- 長瀬治義ほか 1994 『矢戸上野2・3号窯発掘調査報告書』 可見市教育委員会
- 平尾政幸 1994a 「平安京左京二条三坊九町S E 273」『古代の土器3・都城の土器集成Ⅲ』 古代の土器研究会
- 平尾政幸 1994b 「平安京左京二条二坊九町高陽院S G 1-A」『古代の土器3・都城の土器集成Ⅲ』 古代の土器研究会
- 藤澤良祐 1982 「瀬戸古窯跡群」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』 1 瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤澤良祐 1990 「東海地方における窯業生産の転換期について」『シンポジウム 土器からみた中世社会の成立』 シンポジウム実行委員会
- 榎崎彰一 1984 「日本出土の宋元陶磁と日本陶磁」『国際シンポジウム新安海底引揚げ文物報告書』 中日新聞社
- 前川 要 1984 「猿投窯における灰釉陶器生産末期の諸様相」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』 3 瀬戸市歴史民俗資料館
- 松澤和人・河合君近 1994 「古代末期灰釉陶器窯調査報告(上)」『(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』 第2輯 瀬戸市埋蔵文化財センター
- 松澤和人・河合君近 1995 「古代末期灰釉陶器窯調査報告(下)」『(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』 第3輯 瀬戸市埋蔵文化財センター
- 水野裕之ほか 1991 『揚羽町古窯跡群発掘調査報告書』 名古屋市教育委員会
- 山内伸浩ほか 1997 『白土原15号窯発掘調査報告書 多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書第56号』 多治見市教育委員会
- 山内伸浩 2004 「美濃(東濃)窯の山茶碗」『中世土器・陶器編年研究会記録 東海地方山茶碗研究の現在と課題』 科研費・「中世土器・陶器編年研究と流通様相の年代的解明」班
- 山内伸浩 2005 「総括」『喜多町5号窯発掘調査報告書-多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書第76号-』 多治見市教育委員会
- 横田洋三ほか 1984 『平安京左京四条三坊十三町-長刀鉾町遺跡-』(平安京跡調査研究報告第11輯) 古代学協会
- 吉川義彦ほか 1975 『平安京跡発掘調査報告-左京四条一坊-』 平安京調査会
- 吉川義彦 1998 『平安京左京五条三坊発掘調査報告』 関西文化財調査会
- 吉崎 伸・鈴木久男 1985 「鳥羽離宮跡95次調査」『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』 京都市埋蔵文化財研究所
- 若尾正成 1987 「白瓷から白瓷系陶器への転換期について」『美濃の古陶 美濃古窯研究会会報』 第1号 美濃古窯研究会
- 若尾正成 1990 「白瓷・白瓷系陶器編年における一考察」『明和古窯跡群発掘調査報告書』 多治見市教育委員会

## 報告書抄録

ふりがな	ひがしやま114ごうようはくつちようさほうこくしょ							
書名	東山114号窯発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	尾野善裕 山本直人 伊藤伸幸 上條信彦							
編集機関	名古屋大学大学院文学研究科考古学研究室							
所在地	名古屋市千種区不老町							
発行年月日	西暦2006年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひがしやまごう 東山114号 よう 窯	なごやしちくさ 名古屋市千種 区仁座町51番 地	23101		35度 09分 10秒	136度 58分 11秒	2003.01.20 ～ 2003.02.07	約112㎡	大学施設建設 工事に伴 う事前調査
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
東山114号 窯	窯跡	平安時代		灰原		灰釉陶器		灰釉陶器生産末期の窯跡としては、猿投窯東山地区での初めての発掘調査

# 写 真 图 版



1 発見時遺跡近景



2 灰層上面検出作業風景



1 灰層上面検出作業風景



2 灰層上面検出作業風景





1 灰層上面検出状況（北より）



2 灰層上面検出状況（東より）



1 灰層上面検出状況（南より）



2 灰層掘り下げ作業風景



1 土層観察用ベルト



2 土層観察用ベルト



1 6-10Y 4 Xライン灰層断面 (東より)



2 10-14Y 4 Xライン灰層断面 (東より)



1 2-4 X10Yライン灰層断面 (北より)



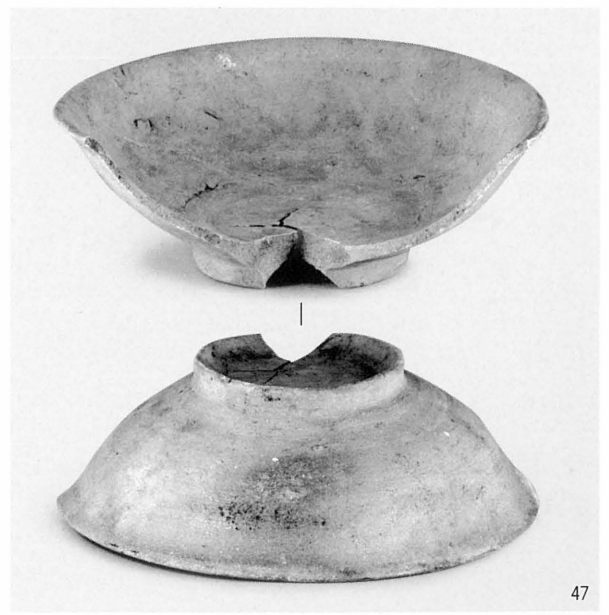
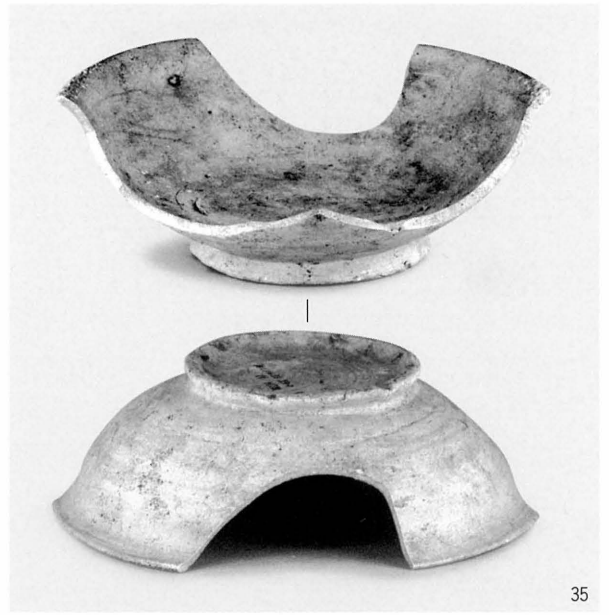
2 10-12Y 4 Xライン灰層断面 (東より)



1 完掘状況（北東より）



2 完掘状況（東より）





60



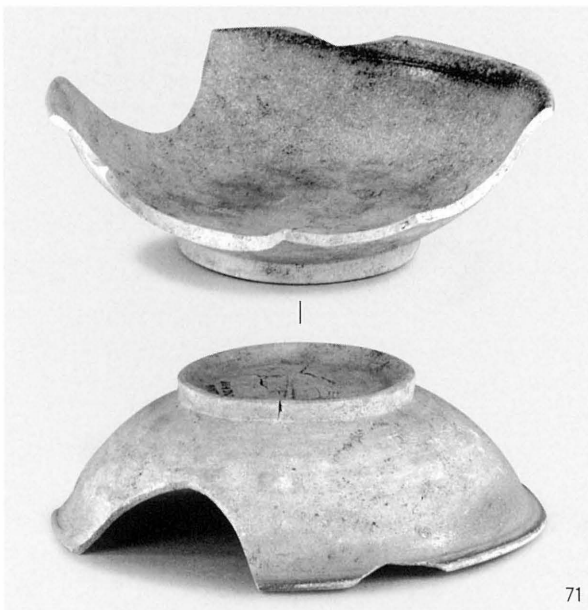
93



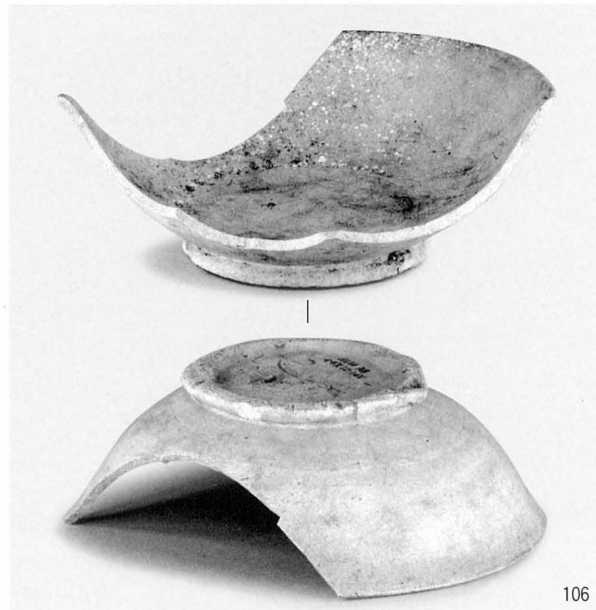
70



103



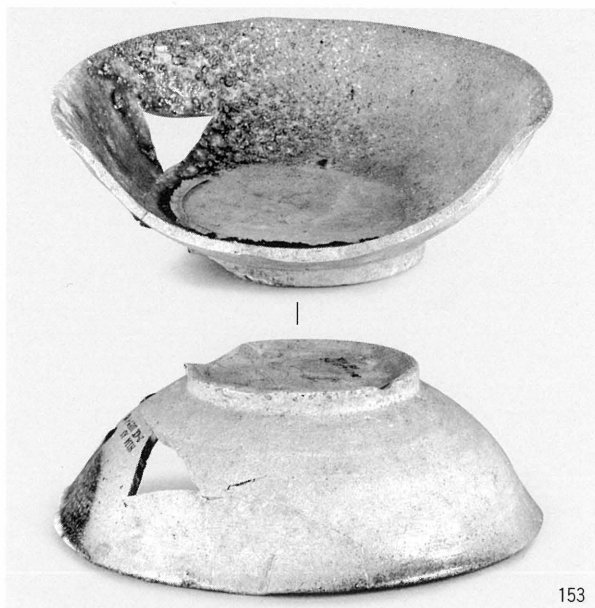
71

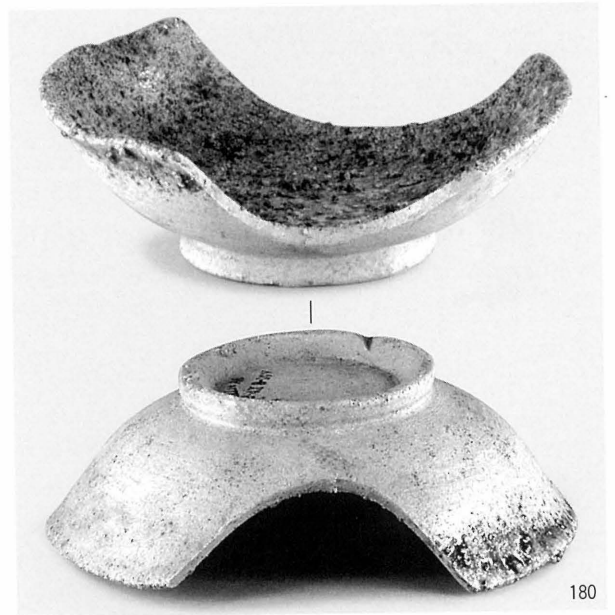
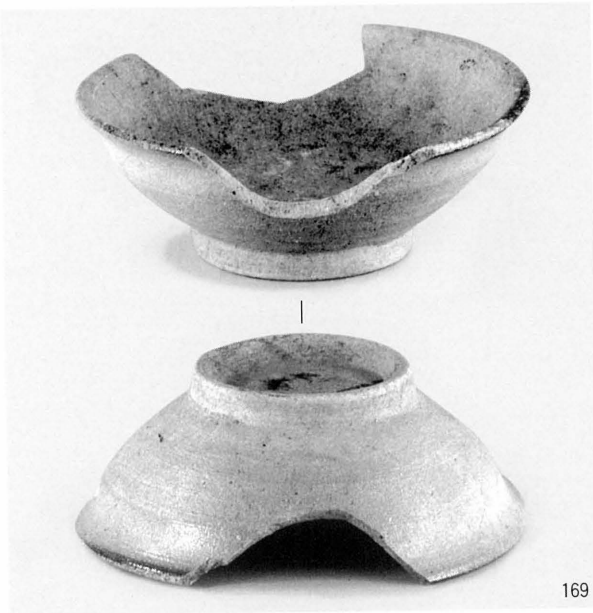


106











184



190



185



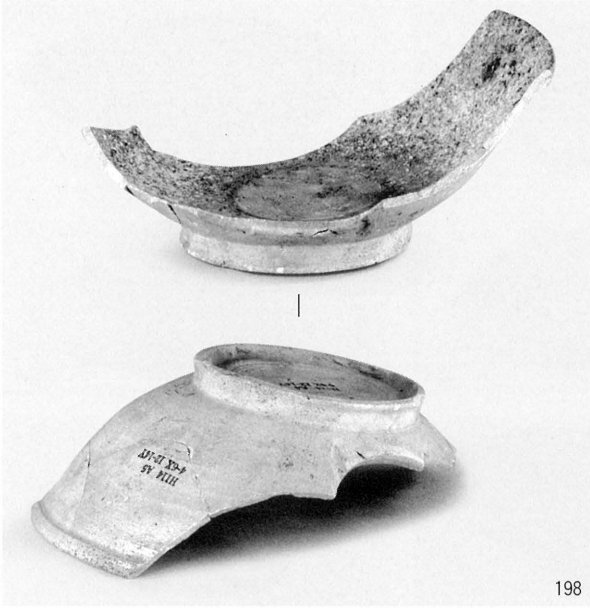
195



189



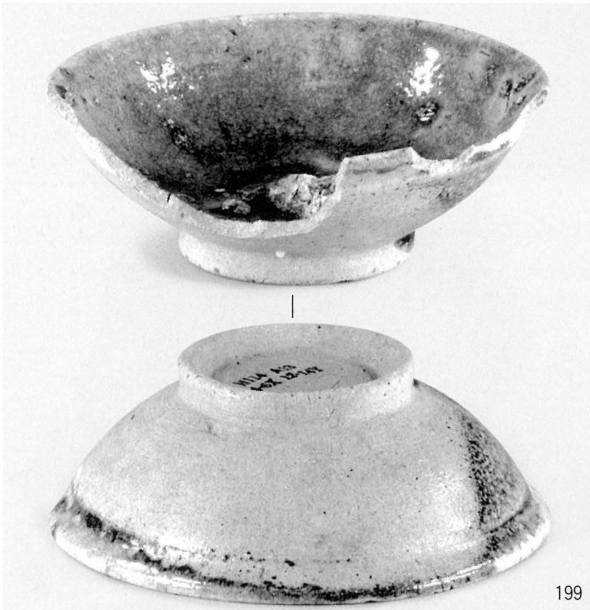
196



198



206



199



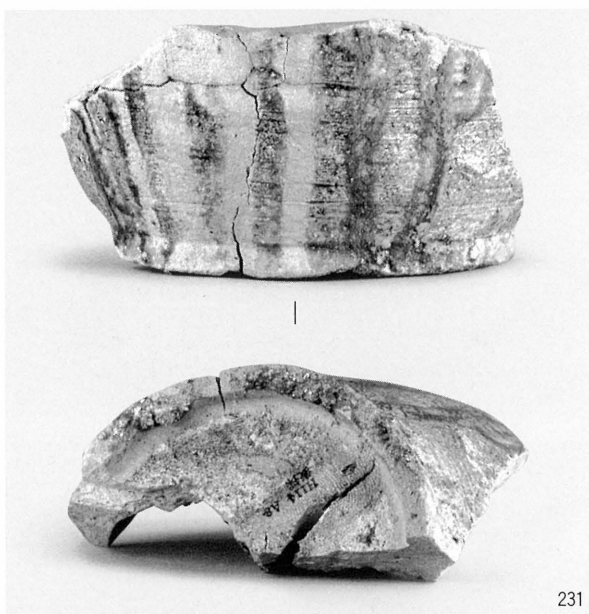
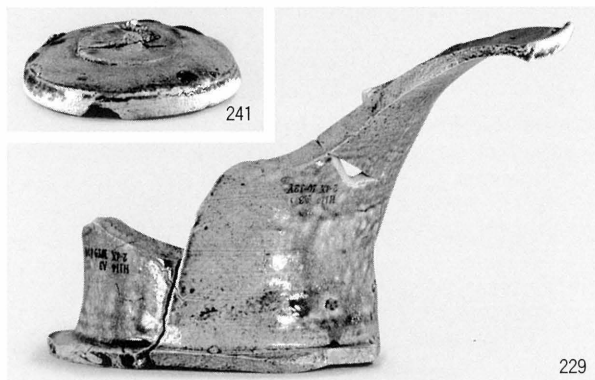
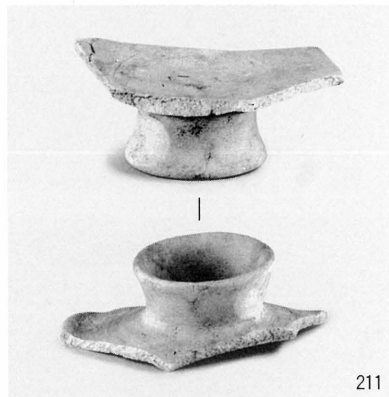
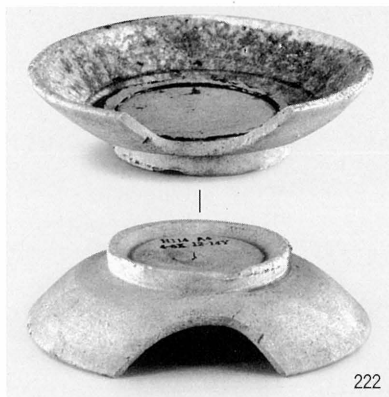
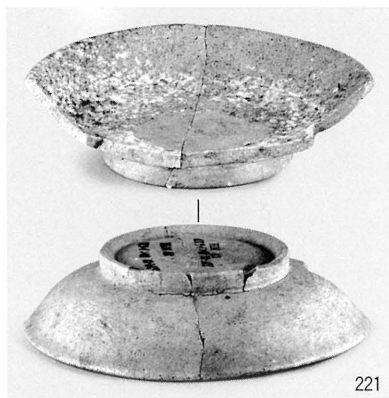
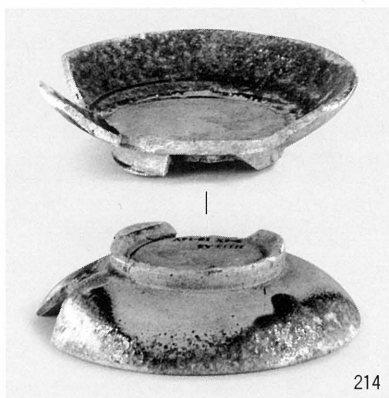
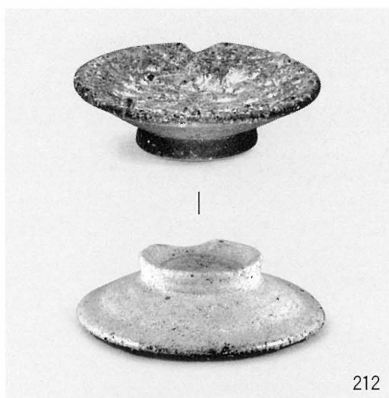
208



205



210



## 東山114号窯発掘調査報告書

発行日 2006年 3月31日

発行 名古屋大学大学院文学研究科考古学研究室  
〒464-0814 名古屋市千種区不老町

印刷 (有) 真 陽 社  
〒600-8475 京都市下京区油小路仏光寺上ル

製作 (有) 京都編集工房  
〒612-0868 京都市伏見区深草直違橋南1-524-24